

荒川重平回想録

昭和から振り返る旧幕臣の幕末・明治

Research Materials

樋口雄彦

回想録は、後年に記されたものであり、日記や書簡のような生の史料に比べ二次的なものとされる。しかし、当事者自身が当時の記憶や記録を使ってまとめ上げた記述からは、逆に、断片的に残された一次史料だけではわからなかった点が明確にされる場合があるなど、独自の価値を有する。たとえ一部に怪しい記述や明らかな誤りなどが含まれていたとしても、それによって全ての価値が失われるわけではない。他に頼るべき一次史料が存在しない場合には、二次史料といえども重要視せざるをえない。史料批判を厳密にした上で、可能な限り利用すべきであろう。

ここに翻刻・紹介する史料は、荒川重平という旧幕臣が、晩年を迎えた昭和初年に記した回想録である。今回紹介する分は全体のほんの一部にすぎないが、一般的な意味で幕末から明治前期にかけての一士族の履歴として興味深いばかりでなく、彼が生徒・教師として学び教えた履歴の中には、幕末・明治期の文化史・教育史等の観点から注意すべき諸問題が含まれている。他の史料からは見出せない内容も少なくなく、翻刻するだけの価値があると判断した理由である。

まずは、原文の翻刻掲載に先立ち、荒川の略歴を紹介しながら、彼の回想録が持つ資料的価値について、簡単な解説を付しておきたい。

荒川重平（敬次郎）は、嘉永四年（一八五二）七月二〇日に生まれ、昭和八年（一八三三）一二月二五日没。旧幕臣出身の教育者であり、明治四〇年（一九〇七）退官するまで、江田島の海軍兵学校で長く数学を教えた。旗本荒川勇太郎の三男として江戸本所に生まれた彼は、少年時代、昌平黉の素読吟味に甲科及第したほか、講武所に学び、歩兵差図役並勤方となった。また、それ以外に、漢学を内山孝之助、フランス語を林正十郎（欽次）、剣術を伊庭軍兵衛に学ぶなど、私塾での教育も受けている。荒川が箕作麟祥に学んだとする文献もあるが（大槻文彦『箕作麟祥君伝』、一九〇七年、丸善株式会社）、本回想録に箕作は登場しない。

講武所時代のこととして、年少者のみで組織された「キンド隊」という一隊があったことを証言しているのは興味深い。横浜に派遣され、沼間守一の下、フランス式陸軍伝習を受けている。さらに京都では、上官の江原素六からオランダ語を習うなど、後に沼津兵学校に入る際の人脈が生じた。京都時代、一六歳の少年の身で彦根藩士の銃隊訓練を任されたことを、今思えば汗顔の極みであると回想している。後年、海軍に奉職した際、元土佐藩士の海軍大佐が幕末の「ええじゃないか」騒動の真犯人だったことを聞いたと証言している点も面白い。ただし、騒動の煽

動者として名前が挙がっている江戸一郎（一八四八～九一）は、土佐藩ではなく徳島藩の出身であり、荒川の記憶違いである。

戊辰の際には、一足早く帰府していたため鳥羽・伏見戦争には加わらなかったが、江戸開城後、大鳥圭介らの脱走軍に加わり、宇都宮方面で新政府軍と抗戦した。脱走中の直属の上官は御料兵を指揮した歩兵頭並加藤平内だった。敵の薩摩軍を軍帽の形から「ナベカブリ」と嘲笑したという話、負傷した小花和某を救った際状況、敗軍の恐怖などが記される。小花和某とは、長野桂次郎（米田桂次郎・立石斧次郎）の兄、歩兵差図役頭取小花和重太郎のことと思われるが、彼は四月二二日宇都宮近郊の雀宮安塚という場所で負傷し、まもなく死亡したというので、荒川の記述は負傷時の状況なのである。捕虜の殺害、民家の略奪についての証言などもあり、戦闘の経過や実相について、従来の記録を補足する価値があると思われる。

ただし、荒川は大鳥らと最後まで行動を共にすることなく、途中で脱走軍を抜け江戸にもどる。会津や箱館までは転戦を続けたのであろう。帰府後も血気はおさまらなかったらしく、上野戦争の時には、彰義隊に呼応しようとして「河津駿河守」（河津伊豆守祐邦）に叱責されたという。

その後、徳川家の駿河移封に従い沼津に移住する。移住にあたっては、江原素六に相談した上、下士官（小筒組差図役下役並）として改めて陸軍に採用され、移住者の列に加えられた。先発隊となった彼は、沼津近郊の農家を回り、東京から大挙して来る移住者の住宅を確保する役目を負った。自身も最初は駿東郡志下村（現沼津市）の民家に兄溝口善補一家と仮寓する。そして明治二年（一八六九）四月兄とともに沼津兵学校の資養生（第二期）に合格するのである。

何よりも、今回翻刻する回想録のうち、数少ない当事者による証言として、史料的价值を有するのが、沼津兵学校に関する記述部分である。

沼津兵学校に関する関係者の回想を含む活字化された文献には、

金城隠士「沼津時代の回顧」（『静岡民友新聞』連載、大正二年）

石橋純彦「沼津兵学校沿革」（『同方会誌』三八〇、大正四〇九年）

武生郷友会「斎藤修一郎先生懐旧談」（大正六年刊、武生郷友会誌付録）

江原素六「急がば廻れ」（大正七年刊、東亜堂書房）

同好史談会編「漫談明治初年」（昭和二年刊、春陽堂）

永峰春樹「思出之まゝ」（昭和三年刊、私家版）

篠田鉦造「増補幕末百話」（昭和四年刊、万里閣書房）

篠田鉦造「幕末明治女百話」（昭和七年刊、四条書房）

市原正恵「山田大夢『戊辰後経歴』——駿州移住一士族の記録——」（『地方史静岡』第六号、昭和五一年刊）

などがある。学校の管理者、教授、附属小学校の生徒、他藩からの留学生など様々であるが、荒川回想録と同じ資養生のものは、永峰秀樹による『思出之まゝ』、『漫談明治初年』、『増補幕末百話』、『幕末明治女百話』である（『漫談明治初年』掲載の「最初の兵学校」、「増補幕末百話」掲載の「門閥打破（陸軍の濫觴）」の談話者は第四期資養生大岡忠良である可能性が高いが断定できない）。永峰の回想は、掲載された書籍の種類は多いが、内容は重複している。

永峰のものと比較し、荒川回想録には独自な内容が豊富に含まれ貴重である。注目すべきは、以下のような諸点である。入学試験で出された作文の問題が、「兵士に刑罰を申し渡す文」「弟の美酒を戒める文」だったと明示していること。黒板・白墨、長椅子などを使用したという、教室内のようなことを述べていること。経済・地理・物理・歴史（いずれも英語）の教科書について具体名を挙げていること。鉛筆を使い簡単な物品から複雑な家屋へと描き進めていく洋画（図画）の学習法について証言していること、等々。それ以外に、教授陣や親しくした同級生の名前・履歴・人柄等に関しても言及がある。ただし、兵学校の学科（歩兵・砲兵・築

造)を「歩騎砲ノ三兵」としている点、西周(元津和野藩士)を「元福井藩ノ人」と記したりしている点など、明らかな錯誤もある。

沼津兵学校の記述にあたっては、自らの記憶以外に、「同方会記事ニ在リ参考トスベシ」とあるように、『同方会誌』に石橋綱彦が連載した「沼津兵学校沿革」「沼津兵学校職員伝」などを参考にしたのであろう。

沼津では、兵学校に学ぶかたわら二等教授方乙骨太郎乙の自宅でも教えを受けた。ともに乙骨塾に学んだ仲として、田口卯吉・堀田維禎(徳次郎)・吉田丹藏・小柳津要人らの名前を挙げている。堀田は同じ第二期資業生、田口は後輩にあたる第六期資業生である。英語のテキストとして「チャールズ五世伝」を習ったというが、その時のノートは現存する。

その他、沼津時代の思い出としては、愛鷹牧での野馬狩り、丁髷を切った際のようななどが詳しく記されている。住まいは、志下から我入道村(現沼津市)、さらに乙骨方、沼津宿上土町の商家と点々と変わった。我入道村には島田三郎が下宿しており、彼に漢学を教わったという。なお、最初の仮寓先は志下村の「ナカンヂョウ」という民家だったとあるが、荒川は明治三六年(一九〇三)八月、志下を訪ね、明治初年仮寓した家が五十嵐忠七家だったことを確認している。

明治四年(一八七二)廃藩置県により沼津兵学校は新政府に移管され、翌五年(一八七二)五月には廃校となり、最後まで残留していた資業生は東京の陸軍兵学寮(教導団)に編入されることになるが、荒川は一足早く自主退校している。明治四年七月、永峰秀樹・中川将行・矢吹秀一・吉田泰正の同級生四名とともに静岡の勝海舟を訪れ、退学して上京することについて協力を求めたのである。学校当局は退学をなかなか許可しなかったが、実力者勝の一声により荒川らは目的を果たすことができた。この退校時の一件については、前掲の永峰秀樹の回想録『思出之まゝ』等にも同様の証言がある。

上京の目的は新政府の海軍兵学寮に入ることだったが、頼った先の赤松則良(元沼津兵学校一等教授方)に海軍に奉職するよう誘われ、生徒ではなく教官として兵学寮に出仕することとなる。同じ沼津時代の恩師乙骨太郎乙からは、すぐに就職するよりも今暫く勉強するように勧められたが、結局就職の道を選んだ。荒川は晩年に至り、若いうちにもっと勉強しておけばよかったと、そのことを悔やんだようである。やはり、同じ海軍でも、文官ではなく武官になりたかったというのが本音だったようだ。海軍兵学寮の教官となったのは、荒川・中川・永峰の三名であり、以後この三人は長く人生をともにすることとなる。

荒川らは海軍兵学寮において、沼津兵学校で身につけた数学・英語を教える立場になった。公務のかたわら、岸俊雄の私塾に通学し数学を学んだり、アメリカ人に英語を教わるなど、さらなる研鑽も忘れなかった。イギリスからドーグラス中佐率いる軍事顧問団が来日すると、その「通訳兼補助」を担当し、自らも本場の海軍教育法を身につけることになる。初期の教え子には、やがて明治海軍の指導者となる山本権兵衛・日高壮之丞ら、薩摩藩出身者が多かった。一時武官への転身を試みた永峰秀樹が、「旧幕人ハ用ヒラレズ」「憤慨シテ」いたとあるように、負けた側の旧幕府出身者にとって、薩摩閥が幅をきかす海軍では何かと愉快ならざることが多かったに違いない。

明治ヒトケタから十年代の東京は、まさに文明開化の真只中であつた。荒川らの日常生活もそんな雰囲気の中で営まれた。銀座のレンガ街の一面に住んだこと、相撲や芝居・寄席に足しげく通ったこと、そして当時流行の写真館・牛鍋屋・人力車などについても本回想録に詳しく記される。廃刀令の後、腰のあたりに寂しさを感じたこと、服装の流行などにも言及がある。官吏としての荒川も、「洋服ノイカガハシキ古物」で間に合わせていたというのも面白い。また、和歌や漢詩文、月琴などの習い事もしたことが回想される。和歌の仲間には、永峰・中川以外に

も沼津兵学校時代からの友人が多かつたらしく、真野肇・真野文二・永井當昌らの名前が挙げられている。自由民権運動が盛り上がる中、当時盛んに行われた演説会とも無関係ではなかったようで、自身も嚶鳴社の社員となり討論会に参加したとある。中川将行・永峰秀樹も同社の演説会には同行していたらしい。嚶鳴社では島田三郎・田口卯吉といった他の沼津時代の同窓生ともいっしょになった。ただし、廃帝論などの過激な主張には反発を覚えたという。

そして、長々と、かつ微に入り細をうがち叙述されるのが各地への旅行記である。休暇を利用しては頻繁に旅行を楽しんだらしく、千葉・古河・栃木・八王子（高尾山）・日光・足利・熱海・伊香保・塩原などへの旅のようすが紹介されている。同行者は、いつもの永峰・中川のほか、山本淑儀・真野肇・平岡道生といった、やはり沼津兵学校以来の恩師・同窓の面々である。これらの旅行記は、明治前期における旅の実態を記録したものとして何がしかの意味を持つであろう。

なお、荒川は東京に出てから結婚している。妻は、旧幕臣出身の海軍大機関士大塚文倫の妹孝子。孝子の姉は武田成章に嫁いだというので、武田・荒川は義兄弟だったことになる。親友の永峰秀樹は武田の姪を妻にしているので、姻戚関係にあったことになるが、孝子は早く亡くなったためか、回想録の中では何も触れられていない。ちなみに、重平の長女豊子は、『広辞苑』の編者新村出（旧幕臣関口隆吉の子）の妻となったが、母は孝子ではなく、後妻の八重である。

他に家族関係については、本回想録に記されていないことも含め若干補足しておく。長兄溝口善補（英一郎・衛）が沼津兵学校資業生の同期となったことは前述した。善補は、開拓使や工科大学に奉職し、明治一九年（一八八六）八月、三七歳で亡くなった。回想録にある通り、残った弟たちが溝口家の菩提寺に墓を建てており、その墓石は東京都港区の立行寺に現存する。正面に「溝口炊夢・溝口多ん・溝口善補之墓」、側

面に「明治廿二年八月 荒川重豊・同重平・同重秀建之」と彫られている。溝口炊夢とは、溝口美作守胤央のことであり、善補の養父である。もともと胤央は、荒川家から出て溝口家を継いだ人であり、善補の祖父荒川猪太郎（川我）の実兄である。つまり重平にとっても大伯父にあたるわけであり、戊辰の脱走時には餞別として刀をもらっている。

荒川家を継いだ次兄重豊（徳次郎）は、幕末には別手組に属し、維新後静岡へは移住せず朝臣となった。慶応元年（一八六五）の明細短冊には、年齢一八歳、高二〇〇俵とある（『江戸幕臣人名事典』第一巻、一九八九年）。明治六年（一八七三）攻玉社に入り近藤真琴に学び、内務省地理局などで測量に従事した。弟の重秀（久五郎、一八五九～一九三一）は、札幌農学校を卒業、さらにアメリカに留学、報知新聞記者・

荒川重平回想録（第一冊）のうち沼津兵学校について記述した部分

東京農学校教頭・通信省官吏・商船学校教授などを歴任した。演劇界の革新に取り組んだことでも知られる（清水一郎「荒川重秀・研究資料」『芸能』三八、一九六一年）。

以上が、本稿で翻刻できた回想録の範囲での、史料解説および荒川の履歴紹介である。実は、荒川重平回想録は、全一四冊（枚数の総計は一四〇〇枚余）からなる。市販の便箋

や「荒川用箋」と印刷された専用の用紙に毛筆でびっしりと、途切れなく書かれた、極めて歴大なものである。起稿時期は、第一冊の表紙裏に息子が記したらしいメモによれば、大正一二年（一九二三）以前だろうとのことである。本文中には、乙骨塾での同門や姻戚の消息を記した箇所「昭和二年」現在とあるので、昭和二年（一九二七）以前に執筆を開始したことは確かである。生まれた時から亡くなる年の途中まで（昭和八年五月三日）を延々と書き綴った、この回想録こそが荒川重平の最も詳しい履歴書といえるわけであるが、すべてを翻刻するには気が遠くなるほどの分量であり、本稿では一冊目の途中までを紹介しただけとなった。

幼年期・少年期や明治の早い時期は別にして、これだけ詳細な回想録を執筆するためには、どうやら下敷きとした日記やメモが他にあったようである。特に各地への旅行記の部分などは実に細かく、記憶だけに頼って記したものでないことは明らかである。事実、回想録の文中にも、明治一九年以降は日記があると記しているし、漢文調で書かれた日記をそのまま引用した部分もある。ただし荒川家に現存する日記は、日露戦争中の「日記 十六」（明治三六年八月二六日～三八年八月二二日）、昭和六年（一九三一）の日記（手帳）など、わずかである。東京の荒川邸は戦災で焼失し、残された資料は防空壕に入れられていたため助かったものであるという。

さて、荒川重平のその後の後半生は、海軍での数学教育一筋だったといえる。もちろん、海軍兵学校が東京築地から広島県の江田島に移転した後は、長く同地に勤務した。また海軍大学校でも教鞭をとった。明治四一年（一九〇八）に発行された雑誌『教育界』第七巻第四号は、前年に退官した荒川の経歴やエピソードを八ページにわたり紹介し、「海軍が強大なる所以は、単に花やかなる活動をなす所の英雄豪傑を有するばかりではない、此の隠くれたる教育界の方面に於て、荒川君の如き有力

なる人物を有して居たからで有る」と述べた。日露戦争を勝利に導いた海軍発展の蔭に、縁の下での力持ちがいたことに光を当て、その典型例として荒川を取り上げたのである。なお、この石川半山執筆の「海軍の教育家荒川重平君」なる文章には、共通する記述や逸話が見られることから、本資料（荒川回想録）が提供され活用されたと推測される。

翻刻分にも登場するごとく、現役中も、明治一八年（一八八五）静岡育英会の結成を主唱するなど、旧幕臣の育英や親睦に積極的に取り組んだ荒川であったが、退官後は一層旧友たちとの交遊に力が入った。退官した年、矢吹秀一（陸軍中将）・永峰秀樹と相談の上、有志を集め「旧事を語らん」と決し、翌四一年（一九〇八）一月荒川宅で第一回の会合を開いた。以後、各自の自宅を持ち回りの会場に、昭和期まで会を続けた。この会を四両会という。沼津兵学校資業生が毎月四両の手当を支給されていたことに由来する。四一年（一九〇八）五月には資業生出身者が旧師を招き謝恩会を盛大に開いたが、それには当然荒川も出席している。彼は沼津兵学校出身者の中で常に交流の輪の中心にあったようだ。

その他、同方会（明治二八年設立）、旧幕府史談会（三二年設立）、葵会など、旧幕臣の懐旧や親睦を目的とした諸団体の会員でもあった。

荒川が亡くなったのは昭和八年（一九三三）一〇月二五日、八三歳であった。一か月後、数学史家小倉金之助は、『大阪朝日新聞』に載った荒川の死亡記事を冒頭に引いた、「明治十年代の数学界と海軍」なる論文を発表した（後に『数学史研究 第一輯』一九三五年刊に収録）。洋算の普及、とりわけ訳語の統一、横書きの実行に果たした荒川と中川将行の指導的役割を高く評価したのである。小倉による評価は、『数学史研究 第二輯』（一九四八年刊）等でも繰り返された。荒川重平は、明治数学史上に確固たる名前を残した。なお、著書には、中川将行との共訳『幾何問題』（明治八年刊）、『幾何問題解式』（一二年刊）がある。

この回想録は、幕末維新の動乱期に成長し、優れた数学教育家となつ

た彼の、公私にわたる長い足跡を生き生きと伝えてくれる資料なのである。いずれ別の機会に、続きの分についても翻刻・紹介をできればと考えている。

最後に、翻刻・公開をご了解下さった資料所蔵者である荒川鐵太郎様に御礼申し上げる次第である。

(国立歴史民俗博物館研究部歴史研究系)

(二〇〇六年三月二十四日受理、二〇〇六年一〇月二七日審査終了)

〔凡例〕

翻刻にあたっては、以下のような方法で行った。

1. 原文の有無に関わりなく、適宜句読点を付した。
2. 原文には改行がほとんどないため、翻刻でもその通りにした。
3. 原本には本文中や欄外に、朱書きや記号で印を付け、注や加筆・訂正がどこされている場合があるが、翻刻にあたっては本文の当該箇所そのまま続けた。訂正後の部分のみを載せた。しかし、一部、必要と判断したもののみ、「」内に入れ、訂正・加筆であることを明示した。
4. 明らかな誤字等についても、訂正せずそのまま翻刻した。
5. 割注が多用されているが、翻刻にあたっては本文と同じポイントとし、――との間に示すこととした。

史料翻刻

「此の起草は大正十二年（震災）以前千葉県安房郡船形町閑荘にてはぢめられたるよう想像す」（表紙裏書込）

予ハ嘉永四年即チ皇曆二五一年、陽曆一八五一ノ七月廿日ニ生ル之ヲ太陽曆ニスレバ八月十八日トナル、父ノ家ハ江戸本所緑町「三丁目」東北ノ角屋敷ニアリ現今ノ本所緑町公園ハ旧津輕藩邸ノ趾ナリ此邸ノ西南ニ方ル、明治維新後ハ一時陸軍歩兵營所トナリシコトアリ、附近ハ皆旗本ノ士ノ住宅ニテ同町ノ黒田桑之助後陸軍少将男爵黒田久孝氏ハ予ノ兄等ト友タリ又明治ニ入り邸内ニ河合操？氏アリ後陸軍大将參謀総長トナル又邸内ニ平山 氏アリ其姪「オイ」ノ加藤定吉氏ハ屢々平山氏ニ來ル後海軍兵學校ニ入り予ノ教ヘ子トナル、今ノ海軍大将男爵加藤定吉君青島攻撃ノ海軍司令長官タリ、◎安政二年十月江戸大地震ス、夜中ニ誰レカニ背負ハレ、土藏ノ下ヲ過ギシ後其壁崩レ落チタルニ驚キ、邸内西方ノ角場内ニ野宿シテ眼ヲ覚セシニ附近ニ火災ノ起リシヲ見シコトヲ覚ユ、角場トハ小銃射的場ノコトニテ高キ射塚ノアリシヲ覚ユ、和流ノ旧火繩銃ニテ練習セシモノナリ。同四年九月廿五日亀戸天神祭ニテ仲間（僕奴）ニ背負レテ參詣ス大雨ニ逢ヒ或ル菓子屋店前ニ置カレテ心細ク感ゼリ是ハ僕ガ雨具ノ借用カ何カノ為メ予ヲ此店ニ托シテ一時相離レタルナリ、其後眼ヲ覚セシニ大ナル馬廄内ニアリ仰ゲバ大傘ヲ張りアルヲ記憶ス余ハ忘ル、予父ハ文武ニ長ジ殊ニ鎗術ニ長ズ予幼時父ノ教ヲ受ケ鎗ノ入身ヲナス入身トハ道具ヲ附ケズ只鎗ヲシゴキテ衝キ出スノミ、父ヲ目ガケテ衝キ出セシニ父ハ之ヲ払ヒ除ケシニ予ガ鎗ハハネ飛バサレテ面ニ当リ前齒一半ヲ折ル、予ハ泣涕シテ縁側ニ伏シタルヲ覚ユ、明治ニ入り横浜ノ西洋齒科医ニ「タノミ」入レ齒ヲナセリ、父ハ小普請組世話取扱今ノ幹事ノ様ナル役ニテ勢力モアリ一時ハ盛況ヲ呈セシナラン、^{（朱書）}「小普請組トハ無役ノ士ヲ云フ」父ハ鰻飯ヲ好マレ一分ノ大串井ヲ――

一分ハ金一両ノ四分ノ一——大和田トカ云フ鰻屋ヨリ取ラレタリ、又屢々家ニテ宴会ヲ張ラレ、芸妓小ヤオトイフモノノ来リ與ヲ助ケタルヲ覚ユ。手習ハ斎藤と云フ先生ニ入門シ一日机ニ向ヒ草紙ニ墨書ス先生時々見廻リアリ草紙ヲ驗セラル遊ビニフケルタメニ手習ハセズ水ニテ草紙ヲ浸メラセテゴマカスコトアリ発見セラルレバ罰トシテ机上ニ直立セシメラル、予ハ此罪ヲ受ケシカ否カ今ハ記憶ニ残ラズ、歳ノ暮ニハ餅搗「モチツキ」アリ未明ヨリ「ヒキヅリ」ナル大白ヲ引摺リ職人数多来リテ餅ヲツク予等玄關ニ出デ、之ヲ見ル、嬉シク衆ク、大根オロシヲ附ケタル搗キ立テノ餅ヲ食フ、正月ニ入り三河万歳ノ大夫某、才藏ヲツレテ来賀、大夫ハ可ナリノ老人ニテ面白オカシク大鼓ヲウツ、才藏ハ小鼓ヲウチテ之ニ和シ狂態奇声婦女子ヲ追ヒ回シ抱腹絶倒セシム終リテ食事ヲ与ヘ祝儀ノ金ヲ与フ、七日ノ七草粥ニハ早朝ヨリ組板ニ七草ヲノセテ庖丁ニテ之ヲ敲キテ曰ク「七草ナヅナ唐土ノ鳥ガ日本ノ土地ニ先キニトントントントン」ト唱ヘ、七草ヲ入レタル粥ヲ喰フナリ、十一日ニ藏開キ式アリ御供ヘ即チ神ニ供フル丸キ餅ヲ崩シテ汁粉餅トシテ祝フ、十六日ニハ「御家ジヨ」ノ祝アリ、一人前錢十六文ノ食物ヲ食フ、食中言語ヲ禁ズ、予ハ六七才ノトキ「^(朱書)之ニテ」煎花豆「^(朱書)豌豆」ヲ買ヒ、之ヲ食フ、徳次郎「^(朱書)重豊」兄上ハ今坂餅カ何カニテ早ク食ヒ終リ予ニ向ヒイロ／＼カラカヒ「^(朱書)ト擲擲シテ」口ヲ言ハサウトセラル、十六文ノ豆中々多量ニテ食ヒ尽セズ其中段々カラカヒ甚シク堪ヘキレズ泣キ出シテ兄ト喧嘩ヲ始ム、箒ヲトリ兄ヲ追ヒ二階ニ逃ゲラルルヲ階段ノ下ヨリ例ノ残りノ豆ヲバラト抛ケツ、アリシ時ニ松井ノ大伯父サンガ来ラレ、吃驚シテ止メタリ、恐ハイ伯父サンナリシ也、或時兄上ト近処ノ小供等ト玄關前ニテ独樂當テヲ遊戲中、兄上ノ鉄輪ノ独樂ガ此小供ノ頭ニ当リ、傷キテ大騒ギヲセシコトアリ、或時西隣家伊東？ハ家モ良ク大ナル池水アリ泉石假山頗ル雅致ニ富ム錦魚、鯉等ヲ飼フ、池中ニ井戸アリ、予邸ニモ池アレドモ隣家ニ比スベクモナシ、或日玉網ヲ持チ密ニ隣家ノ垣根ヨリ

入り魚ヲ掬ヒ捕ラントス、隣ノ隠居老爺ノ大声叱咤スルニ会ヒ肝ヲツブシテ逃ゲ帰リシヲ覚ユ、今ニシテモ其時ノコトヲ恥ヂ汗出ツ、隣家境ノ垣根ハ寒竹ニテ其箒ハママゴト用ニシテ煮テ食セシヲ覚ユ、家ノ伯父縫之助氏ハ三男ニ生ル、生来暗愚ニシテ壮ニシテ尚睡眠中使ヲ漏スニ至ル、予母之ガ世話ニ苦シマルヲ見ル、又予等ハ之ヲ輕蔑シテ屢々母ニシカラル、「縫ビンヤ／＼目細ヤチヂレツ毛」トイツテハ其怒ルガ面白クテ／＼、妹まつ女ハ四、五才ニテ夭死ス、兄徳次郎ガ背負ヒ予之レト鬼ゴツコヲナシ逃ルヲ追ヒ松女ノ手ヲ捕ラヘ兄ハ進ミ予ハ引キ、妹ノ腕ヲチガハセ大ニ驚キタリ、又其次ノ妹ハ水死（死体分婉カ）セリ、母病ノ為メ人事不省ニ陥リ、大ナル艾ノ灸ヲ踵ニスエ、針ヲウチ「ア痛タタ」ト叫バレ正氣ニナラレタルヲ覚ユ、其時母ノ曰ク夢ニ道中一僧侶ニ逢フ、僧曰クマダ来ルニハ早シ、帰レト云ハレタリト又父ハ法華宗信者ニテ看經^{カク}シテ仏壇前ニ坐シ、亡女松ノ姿ヲ見タリトイハレタリ、母ノ実父伊藤奎右衛門氏京都カ大坂、在番ノ折、母ノ未タ家ニ在リシトキ夕刻玄關ニテ遊ビ居リシニ門ヨリ父君ノ入り来ルヲ見、驚キテ「父上」ガト叫ビ内ニ驅ケ入り知ラス、今来ラルコトアルベキ様ナシト云ヒ不思議ニ思ヒ居リシニ死去ノ通知到着セリト云ハレタリ、又家ニ伝フ諺アリ、三男ニ馬鹿生ル、而シテ予モ三男其上ニ名モ恵之助ト云フ、伯父ハ三男、縫之助ナリ、兄ハ屢々予ヲ目シテ恵助ト呼ビ厄介ノ涼飯^{ヒヤメシ}ナルヲ暗示セラルルニ至ル、予賁慨ニタエズ、後予ノ元服ノトキ父ニ乞ヒ敬次郎ト改ム、但シ長兄ハ溝口ヘ養子トナリ仲兄ハ惣領トナリ予ハ家ノ次男ナルヲ以テナリ、此仲兄ノ恵助ノコトハ大ヒニ發奮ノ原因ヲナシ其御影ニテ縫之助伯父ノ二ノ舞ヲ踏マズ別ニ一家ノ先祖トナリシハ幸ヒノコトナリカシ、其頃ハイマイマシクテ堪マラズ今ニ見口負ケヤセンゾトリキミシコトアリ、兄上ノ侮辱ヲ謝ス、夕刻ニナルト入江町ナル貧民窟ヨリ胡塵^{ゴザ}ヲカカヘ黒衣ヲ着タル夜鷹ナル売婦ノ通ルアリ、極メテ下等ノ者ニシテ下賤ノ者ヲ相手トスト云フ、以上本所ニ居住ノトキノ記憶ニ残リシ概略ナリ、

是レヨリ居ヲ下谷山伏町ニ移サル、此山伏町時代ハ家計極メテ不如意、父上困難ノ状ヲ知ル、住家モ極メテ手狭マニテ三室位ト覚ユ、海野某ノ邸内、其東隣ハ母上ノ実兄正木留次郎氏ニテ其養父ノ老人、叔母ハ偏盲肥大ノ婦人ニテ好人物、従弟ハ伝吉郎、新作（此トキハ僧トナリテ家ニアラズ、後日光ノ祐乘院住職トナリ明治後還俗シ本版摺リヲ業トシ、再ビ浅草寺塔中象渴町智光院住職トナリ正利ト称ス、子信作）三藏後正修ト云フ海野家ニハ子女数人アリ、姉嬢弟孝三郎等アリ、越後屋トイフ語ノ恐ロシキ者ト思ヒシコトアリ、此ハ此者ヨリ借金アリシモノト見エ其来リ催促セラルルヲ聞キ知リテ恐怖ノ念ヲ懷シキナリ、又或時朝顔売リノ行商朝顔／＼ト呼ブ、母上エ乞フテ之ヲ買フ、火鉢ノ引出シニ錢ヲ見シニ僅ニ数文アリシノミ、或時母ノ命ニテ高利貸ノ老婆ヘ金巻分ヲ借りニ行キ「てんびき」トカニテ最初ヨリ利金ヲ差シ引カレ三朱某錢ヲ渡サレタリ、其時ハ父上ハ大番組ニテ京都在番ノ頃ト覚ユ、安政四年徳川十三代家定公他界セラル、山伏町ノ東方ハ出雲屋敷トテ松平出雲守ノ別邸ナリシナラン、入屋田甫ヲ控ヘ広キ邸内樹木蓊蔚タリ、其楠樹乎急ニ枯凋セリトカニテ是ハ凶事ナリト云ヒハヤセシニ果シテ將軍薨去ナリシト何カ迷信ノ結果ナリシ。或時父ノ命ニテ夜半刻附廻状ヲ小石川白山附近ノ相役某方ヘ送ル使ニ遣ラレタリ、刻附トハ何時ニ受取リテ何時ニ次ニ送ルト時刻ヲ附箋スル急廻状ナリ、当年七八才ナレドモ武士ノ子ナリト自ラ励マシ木刀ナリシカ忘レシガ刀ノ柄ニ手ヲ当テナガラ下谷ヨリドコヲ通過セシカ忘レシガ今ニ覺エテ居ルハ小石川水戸殿ノ裏、富坂（トビザカト称セシカ）ノ半腹ヨリ小石川ノ流れノ上ヲ行ク夜半人通りハナシ、町家トチガヒ寺ヤ邸宅ニテ殊ニ淋シク何カ出ハセヌカ當時迷信深キ世ノ中、幽霊モ狐モ狸モ皆恐怖の代物ナリ出デハセヌカト刀ヲ握リシメナガラ行キシトキ思ハズモ一人ノ老人ナリシカニ逢ヒホット一息道ヲ尋ネ方今ノ植物園昔時ノ御薬園附近ヨリ坂ヲ上リ方今ノ盲学校ノ前ニ出デ指ケ谷町附近ニヤット相役ノ家ニ着キシ頃ハ夜モ明ケ離レ帰途ハ忘レ

タリ、此山伏町ハ入谷田甫、朝兒ノ名所、ランメンナル蕎麦屋ノ有名ナルモノアリ、田甫ニ行キテハ稲虫ヲトリ之ヲ焙烙ニ煎リ之ヲ醬油附ケニシテ食フ、又田甫ノ溝ニ入りテ水泳ノ真似ヲナシ、又田甫ノ稲荷社ノ森ニ遊ビタリ、今ハ昔ノ面影ナシ、田甫ハ尽ク街路ト変ズ、山伏町ノ往来、一間幅位ノ狭路、又浅草ニ通ズル松葉町ノ通りハ非常ニ広キ道ノ如ク思ヒシガ今見レバ四五間ノミ、山伏町ト大通ノ角ニ藤四郎トイフ酒屋アリ、安政五カ六年、予ハ九才ノトキ、正木叔父カノ世話ニテ上野寛永寺塔中常照院隱居常念庵主ニ仕フ、主ハ向島牛御前社ノ東隣長命寺々内西方牛御前社ノ喬木林ニ接ス予ノ外ニ何姓直次郎壯年アリ、此人モ幼ヨリ仕ヘシト云フ、炊事等ヲ担当ス、予モ手伝フ、家ハ茅茨ニテ奥ハ拾疊敷殿程、納戸、次ハ八畳程、東方ニ直次郎氏ノ部屋三畳程、次ハ台所トス、主ハ風流ノ人ニテ榎客来リ又和歌ヲ嗜ム、一榎友アリ、肥満ノ老人、屢々来ル、此人ハ樂隱居ナルベシ、一日来リ、婦ルニ方リ菓子皿見エズ、主之ヲ詰レバ平然トシテ袂ヨリ之ヲ出シテ辞シ去レリ、主曰ク彼ハ盜僻アリ、コレ病ナリトテ深ク咎メズ、予呆然タリ、予此ニ仕ヘシ初メハ家恋シク夕刻柴門ニ倚リテ西方ニ向ヒ密カニ涙ヲ拭ヘリ、長命寺ハ有名ノ梵宇ニテ其赤門内左側ニ桜餅店アリ、向島ノ桜餅ト共ニ其娘とよノ嬌名都下ニ鳴リタルモノ、予ハ朝夕此店ニモ行キ遊ブ、とよ女モ予ヲ可愛ガリ、或時予ヲ抱キタリ、予モ嬉シク思ヒシナリ、其容姿小供心ニモヨク覺ユ、重險ニテ色ハ余リ白カラズ目元殊ニ愛ラシク見エタリ。庵前ノ喬木ニハ夕刻ニナルト紅鶴来リテ峙トス、其色薄赤ニテ毛冠アリ、優美ナルモノ其声モヨク、予之ヲ好ミ仰キ見ル、主ハ予ニ歌ヲ教エラレタリ、夕暮ノ歌一首作りテ奉リシガ今ハ其句ヲ忘レタリ、囀ヲモ習ヒ覺エタリ、主ノ外出セラルルトキ供奉スルコト屢ナリ、袴ハナク羽織ニ大小刀ヲ帶ブ、上野ノ本院ニ行キ或ハ主ノ生家齋藤氏ニ供セリ、氏ノ家ハ浅草三筋町ノ御家人ニテ主ノ姉ナルベシ老女ノ予ヲ厚遇セシコトヲ覺ユ、御家人ナル通称ハ下士ヲ云フモノ、方今ノ判官以下ノ輩也、之ヲ「御目見エ以下」

トイフ、將軍ニ拝謁脇ハザルヲ云フ、當時向島ハ幽閑ノ地ニテ枕橋ヨリ土堤ノ東側ニハ水戸徳川家下屋敷ノ外ハ三囲社マテハ田圃ニテ牛御前マデモ斑ニ植木屋ヤ農家ヤ茶店等アリ、牛御前ニ通り其東側ニ奥「弘」福寺、其先キニハ秋葉社ノ広キ境内等アリ、長命寺ヨリ白髪社木母寺ニ至ル土堤ノ左右ハ人家稀レニアリ田畑打続ク農家点綴シテ眺望モ極メテ佳、木母寺裏ナル綾瀬の里ノ幽邃ナルコトモ臆口ニ覺ユ。後、主人ハ目黒不動尊ノ寺ノ住持トナリ移ル、予之ニ従フ、本堂、滝、表門、門前、茶室等ハ方今ト大差ナシ、寺ノ庫裏殿宇ハ頗ル広ク寺内ノ東隅ニアリ、本堂ノ裏山ハ森々タル樹木蔚蒼タリ、行人坂下リ太鼓橋、石造ノ眼鏡橋ニテ有名ノモノナリシ、其辺皆田野ニテ寺ニ近クニ從ヒ人家打続キ居タリ、寺ニハ旧來ノ寺侍、小姓、寺僕モアリ、向島在住トハ雲泥ノ差ヒニテ薪炊ノ勞モナカリシガ氣分ハ返ツテ愉快カラザリシ。偶々癩癬ヲ疾ム、之ヲ治癒センガ為メ入浴數回、水瘡忽チ癒セ始ム、予小供心ニ其危險ナルヲ感知シ「豆腐油揚」ヲ食フ、忽チニ青豆ノ如キ水瘡再発シ遂ニ癒ス、其痕跡ハ手頸指間ニ存シ後年永ク消失セズ、予十三才カノ時、仕ヲ辭シ家ニカヘル、家ハ下谷山伏町ヨリ神田駿河台胸突坂上ナル溝口邸内西隅ノ長家ニ移ル、ソハ家計困難ノ結果ナリ、大伯父御先祖頭溝口美作守胤央ノ庇護援助ヲ受ケシコト多大ナリ、胤央ハ祖父川我ノ実弟、予長兄英一郎「後善補」ノ養父ナリ、其時父ハ新御番組ニ転任シ五十俵ノ加俸ヲ受ケ居ラル、偕母ハ予ノ長ク他人ノ家ニ在ルヲ嘆カレ、又予ガ病ミタルヲ痛心セラレタルナランカ、暇ヲ乞フベキヲ父ニ迫ル、父上ハ寺ニ來ラレ、予ヲ他ニ養子ニ遣ルトイフヲ口実トシテ遂ニ許可セラル、家ニ歸リ長兄ニ附キテ漢書素讀ヲ習ヒ、又湯島樹木谷ノ儒者内山孝之助氏ノ塾ニ入ル、慶応元年正月十八日（新曆ニ改メ二月十三日）父死ス、年四十五、父ハ西丸ニ登城、宿直スルナリ大御番ヨリ新御番ニ組替ヘセラレテヨリ間モナキコトナルカ、月々何サイ？「何サイトハ何齋ニテ仏事ノ月六齋ナドヨリ來ル」ノ当直毎ニ宅ヨリ重話ノ食物ヲ送り相番――

同僚ナリノ先輩等ニ供スルナリ、其席次ノ高下ノ嚴ナル軍隊内ノ如シ、殊ニ先輩ニ対スル後輩ハ主従ノ如シトイフ、食物ナドヲ供シテ其御機嫌ヲトルナリ、予其重話持參ノ使ニ西丸ノ詰所ニ行キシコトヲ記臆ス、父ハ宿直中発病ス、予ハ家士ノ名目ニテ駕籠ヲ以テ病父ヲ迎ヘ歸レリ、尋イテ没セラル。同年湯島昌平齋ニ於テ四書五經―大学、中庸、論語、孟子、易書、詩、礼記、小学―ノ素讀吟味―吟味ハ試験―ヲ受ケ、及第甲科、其申渡シハ「丹後編三反」荒川敬次郎素讀出精ニ付拝領物被仰付、猶出精可致候トアリ、兄徳次郎重豊、家ヲ繼グ、馬術劍術ヲ能クセラル、下谷車坂町「桜香」トイフ化粧品等ノ店ノ北ニ入ル横町ノ西側ノ家ニ移ル、家ニハ母八十「ヤソ」伯父縫之助、兄「重豊」、弟久五郎重秀と予の五人ナリ、東隣ノ士某氏ニ就キテ日本外史ヲ習フ、其薰陶ニヨリシカ當時ノ形勢ヲ粗ボ知リシト思フ、兄ノ劍術ノ師下谷御徒士町伊庭軍兵衛先生ノ門ニ入ル、先生ヲ養父トスル先代ノ実子八郎先生殊ニ人望アリ、弟某モ劍術ヲ能クス、「下谷車坂ノ家ハ何ト云ヒ、又借家ヲシカ買ヒシカ隣家ノ漢學ノ出来る人ハ何と云フ、□文久年間カ、勝五郎さんハて？伊庭八郎ノ弟？軍兵衛ハ養父」、其當時劍客齋藤弥九郎ハ九段坂上、桃井先生――。小谷先生「勝海舟」ハ本所亀沢町ニ在リ、千葉周作先生ハ神田御玉ヶ池ニ在リ、榊原健吉先生ハ下谷広徳寺ニ在リテ予家ニ近シ、先生ハ棒ノ様ナル太キ竹刀ヲ用ヒラル、三橋虎藏先生アリ、両先生トモ伊庭道場ニ來ラレ教エラレタルコトアリ、或ル寒稽古ノトキ払曉稽古中相手ニ咽喉ヲ衝カレ「垂レ」ノママニ板壁ニ押シツケラレ閉口シタルコトヲ覺ユ。垂レトハ「面ニ附ケル垂レ具」ナリ。又神田ナル講武所―方今ノ三崎町ニテ東ハ今ノ電車通り、西ハ運河ヲ堺トシ北ハ堀ノ土堤、南方一町許リ街路ヲ界―即チ歩、砲、鎗、劍等修學ノ所ニ入り歩兵科ヲ習フ、少年隊即チキンド隊ト称ス、蓋シ蘭語ナリ、講武所教授ノ中ニ江原鑄三郎君アリ、「ロイス、コンマンダント」ト混号セラル、氏ハ貧困且ツ無頼着ノ人、半虱子ガ附キ居リシトテ、カク

ハイフナリ、「ロイス」ハ虱、「コンマシタ」ハ司令ノ蘭語ナリ、後ノ素六君ナリ、同二年六月左ノ命ヲ受ク、此頃家ハ本所緑町ナル旧宅ニ戻リ居タリ、「徳次郎弟荒川敬次郎 右歩兵差図役並勤方可申渡候、為御手当拾五人扶持被下候間、其段も可申渡旨、昨十五日水野和泉守殿被 仰渡候、依之申渡寅六月十八日」、拾五人扶持トハ一人扶持一ヶ月玄米一斗五升ノ十五倍即チ一ヶ月六石二斗五升一年七十五石ナリ、今昭和ノ物価ニ換算スレバ三千三百円以上トナル、今ノ中佐俸ニ匹敵ス、差図役モ同俸ナリト覚ユ、差図役並勤方―サシヅ、ヤク、ナミ、ツトメカタ(キンポウトモイヘリ)―ハ少尉(今ノ)ニ相当ス、時ニ満十五才ノ十六才也、兵営當時之ヲ屯所トイフ、予隊ハ神田小川町旧土屋殿邸跡ニ在リ、一町四方モアル大邸ニテ其駿河台ニ向フ裏側東北隅ニ今唯一ノ遺物ハ公孫樹大木ナリ、表門通りハ繁華ノ街衢トナル、当時小川町錦町猿楽町神保町九段下一体ハ大名旗本等ノ邸宅櫛比ノ処ナリ、此屯所在營兵士ハ幕府領地ヨリ募集ノ農民ヨリ成ル一大隊、其長ハ歩兵頭、隊ハ四中隊、其長ハ差図役頭取、小隊長ハ差図役、半小隊長ハ予ガ役ナリ、下士ハ差図役下役―シタヤクトイフ、四中隊ノ外ニ一中隊アリ、散兵隊ナリ、當時ハ本隊後方ニ在リ戦時ハ隊前ニ散開シテ前進スルナリ、蘭語「チライルレー」ト云フ士官モ少尉二人附属ス、此屯所ノ大隊長ハ何何之守(忘ル)、馬上ニテ号令ヲカケ練兵ス、頭取ニハ石丸某、江原鑄三郎、何浪之助等、改メ役ナル者アリ、庶務、会計等ヲ掌リシカ、権力アリシモノ也、同僚ニハ佐藤某(此人楓樹ヨリ砂糖ヲ製出スベシト言ヒシヲ以テ佐藤丹楓ト混号セラル)アリ、此兵卒ハ純農民ニテ無学鈍物多ク、左右ヲ間違フモノモアリ、足並ヲ教ユルニ左リ右ト号令スルニ往々トリ違フコトアリ、此年大手前屯所ニ転動シ横浜野毛山ニアル操練所ニ入り仏式歩兵科伝習ヲ修ス、其初期仏人シヤノアン乎ノ直伝生ノ中沼間守一氏ノ教ヲ受ク、兵式体操ヨリ始マル、其峻烈厳正ナル其当分ハ身体痛ミテ屈ムコト困難ナリシ、服装モ仏式ノ折衷ニテ「ツボン」ハ襷ヲ附ケ裁著ニ

似タリ、屈伸自在ノモノナリ、腹巻ニ赤色ナル毛布ヲ用フル風習アリ、帰隊ノ後、京都ニ戍ス一中隊々長ハ江原鑄三郎―後素六ト改ム、明治大正ニカケ著名ノ名士ナリ、小隊長ハ岩松太郎―名家ナリ、半隊長ハ小川助太郎及予ノ四人ナリ、大手前ノ兵卒ハ町兵ナドト称エ、一般ニ募集セシ者ニテ町人百姓浪人等、無頼漢モ雜リ、御シ難キモノドモナリ、道中記ヲ略記センニ服装ハ一種ノミ裏金陣笠、レクシヨン、ダンブクロ、ヒキハダニ大刀一本、脇差ナル小刀ハ廃止ス、草鞋、鞭―指揮用―、予ハ初メテ西洋靴ヲ買フ、値五両―当時外国品ハ唐物ト称ス―、当時ノ士官ノ用ヒシ陣笠ハ形(図あり)ノ如ク前上部ニ家紋、中央ヲ横ニ一線ヲ附ス、差図役ト同並勤方ノ分)色ハ表ハ青色、線、紋、裏ハ皆金色ナリ)差図役頭取ハ二線ニテ中央ニ一線加ハル)頭ハ表黒、線ハ三本平、裏紋共ニ金色ナリ)。レクシヨントハ黒ノ筒袖ノ陣羽織ナリ、背ノ紋ハ黄色)ダンブクロ細袴トモイフ、方今ノ者ト同ジ、黒色)ヒキハダトハ革製ノ細帯ニテ右肩ヨリ斜ニ左脇ニ掛ケ下ゲ腰ノ辺ニ刀ヲ夾ム革ヲ附シ之ニ大刀ヲ夾ミ下ゲ)鞭ハ多ク竹ヲ用フ、兵隊ヲ指揮スルノ用ニ供ス)下士官ハ笠ハ表黒、紋、裏赤、レクシヨンノ紋ハ萌黄ナリシ、委細ハ省ク、九段ノ遊就館内ニ明細図アリ、道中ハ隔日当番ニテ兵隊ニ附ク、休日ニハ随意旅行、自用ノ駕籠ヲ使フ―小川氏ハ五百石カノ殿様ニテ長棒附ノ駕籠ノ棒ヲ短キ切棒トシ、予ト共用ニ供セラル、長棒ナルトキハ四人かこきヲ要ス、之レハ許ルサレズ、切棒ナレバ二人ニテ足ル、サレド駕籠自体ハ元来長棒の故大ナル者ナリ、立派ナリ、内広ク座臥自在ナリ、故ニ其内ニ菓子杯ヲ入レ、又ハ書物ヲモ入レテ或ハ乗リ或ハ徒歩シテ隔日ニ悠々ト旅行シ、途中名物ノ食物ヲ味ヒ又ハ名所ヲ見物ヲモナシツツ樂々ト旅行ス、今記憶ニ残ルモノハ酒匂川ノ肩車渡シト人足(徒渉スル人夫)ノ肩ニ踞シ両手ニテ人足ノ額ヲ押ヘ乍ラ川ヲ越スナリ、水ノ深浅ニヨリテ賃金高下ス、故ニ成ルベク深処ヲ撰ンデ徒渉ス、予ノ川越シノ時モ上流ノ方ヲ見レバ極メテ浅ク自身徒渉スルモ易キヲ見、苦

笑セシホドナリ、輦台（川越シ用）渡シハ肩輿ニテ四人、之ヲ昇^カク。箱根ノ関所ニ至ル、宿ノ旅籠屋某ヨリ贈物来ル―予父京坂在番ノ時宿泊セシ定宿ニシテ兼ネテ先触ニテ前以テ予ノ来ルヲ知ル也、予モ予知セシユヘ壹分銀ヲ茶代トシテ之ニ酬ス。原、吉原ノ辺ニテ富士ノ中腹ニ鶴亀芝ヲ見、又戻リ富士トテ右ニ見シモノガ左ニ見ル所アリ、道ノ曲折セシニヨル也、家来―家僕ナリ、名ヲ藤助トイフ、下谷山伏町ニ居リシトキ出入ノ八百屋ノ主人ニシテ道中ニ熟^ナレタル者、予ノ若年ナルニ保護ノ任ヲ委子タルナリ、此藤助ガ駕昇キ人足ト相對協議シテ三人（即チ手代リ一人ト昇キ方二人）ノ中チ一人ヲ減ジ幾分賃錢ノ中ヲ取ル其一人モ勞力ナクシテ賃錢ノ幾分ヲ得ルユヘ而得トナルナリ、残り二人モ幾分ノ利ヲ得ルナリ、小川ノ家来ハ待分ニテ両刀ヲ帶シ居リ是モ中々ノ道中熟練ノモノニテ中々ノ老人ナリ、藤助ト相談シテ此手段ヲナセシモノト察セラ^ル、藤助ニ陣笠ヲ持タセテ徒歩スルコトモアリ、宇都の谷峠、佐夜ノ中山夜泣キ石ヲ見、―坂路ノ中途ニアリ其傍ニ飴ヲ売ル店アリ、嬰兒ニ飴ヲ与ヘシトイフ伝説アリ、鳴海絞、桑名焼蛤ヲ食ヒ、桶狭ノ義元ノ墓、吉田ノ桶酢ハ旨シ、大井川輦台渡シ、荒井ノ渡シ―浜名湖ノ渡シ、宮ヨリ桑名マデノ渡海、関ノ地蔵尊ヲ拜ス、大津姥ケ餅……（宇都の谷峠之……地蔵尊マデ順序ハ改ムベシ）、或日非番―当直ニアラザルコト―ニテ藤助ニ陣笠ヲ持タセナガラ松並木ヲ過ギテ龜山ノ宿ニ入ル、忽チ一人ノ少年竹箒ヲ持シ予等ノ前面ニ来リ声ヲ張りテ「下ニく―ト連呼ス、予驚ク、藤助即チ之ヲ辞退シ又制シテ去ラシム、彼曰ク是レハ領主ヨリ幕府ニ対シ御馳走スルナリト、予ノ身分ヲ表スル裏金ノ陣笠ガ「下ニく」ヲ云ハシメタルナラン、実ニ滑稽至極ノコトナリ、粟津ノ義仲寺ヲ過グ、藤助曰ク「木曾殿ト背中合セノ寒サカナ」トイフ句アリナド教ユ、彼レ風流氣アル者ナリシ、大津ヨリ隊ヲ整ヘ太鼓入りニテ京都ニ向フ、子女集リ見ル、「イトハン来テ見ナハレ、ヲミヤ、ヲソロエテ……」云々ト京言葉モ面白ク感ズ、一ト先ツ東寺ニ宿陣ス、兄

溝口五左衛門モ歩兵士官―小筒組ニ属セシカ、小筒組トハ御家人ノ下輩ヨリ成ル兵隊―ニテ同ク在京、且ツ東寺ニ在リ、予之レニ謁見セリ、後船岡山下ノ寺ニ宿ス、其附近ニ焼場アリ、其臭氣不快ナリシヲ覺ユ、又千本通りノ一寺ニ寓ス、小川助太郎君ト同居ス、後二条城内旧大番組ノ勤番セシ小屋―在番人ノ舍宅―ニ移ル、内堀ノ北側ニ数棟アリ、二中隊ノ士官分宿ス、中隊長ト小隊長各一舍、小川氏ト予ト一舍ニ同居ス、予ガ中隊長江原氏ハ予ヲ愛シ何カト世話セラル、蘭語ヲ教ヘラル、當時ハ方今ノ「ハイカラー」流ニ似タルアリ、吾ヲ「イキ」、汝ヲ「ミ子^ル」に「ハハレン」シテ「スターン」……（特ニ省キタリ）「ボイク」「リクテン」ト云フニ至ル、予ハ康熙字典―之レヲ増島鑄太郎叔父ヨリ借ル、大冊ナリ―、^{（朱書）}「原本」、日本外史等漢籍ヲ持チ来レリ、氏ハ之ヲ以テ予ヲ愛セラレタルノカ、爰ニ特筆スベキコトハ予ニ彦根藩士ニ銃隊操練ノ教授ヲ命ゼラル、多分江原氏ノ推撰ナルベシ、予ハ藤助ヲ從工例ノ陣笠ヲ持タセ、東山ノ同藩宿陣ノ某寺ニ向フ、途中諸藩士浪人等ニ出逢ヒテ危險ノ事モアリ、彦根藩家老小股土佐ニ面会ス、小銃使用法、操練、兵書輪講会頭―野戰要務ハ大島圭介氏ノ訳書、當時有名ナルモノナリ、此書ノ講義ニ臨ミタリ―等ヲ負担ス、或時ハ一大隊ノ操練ニ大隊長トシテ号令運兵セシ時ハ得意極マレリ、平生ハ半小隊長ナルニ歩兵頭ノ役ヲナセシ故也、今カラ思ヘバ冷汗ガ出ル、歳僅ニ十六、実ニ乳具拔ケザル小僧ナルニ臆面ナク為セシ者カナ、後チニ近江牛ノ味噌漬一樽ト金若干、之レハ忘ル、ヲ惠贈セラル、此時天下紛乱京師ノ状況言語ニ絶ス、幕兵ト浪士等藩士等ト闘争絶間ナク歩兵ハ銃剣ヲ拔キ之ト闘フニ至ル、乃チ銃剣ニ封印シテ抜ケ能ハザラシムルノ窮策ヲナス、予ハ江原氏等ト宇治見物、東山弥阿弥楼、嵐山奥山ノ松茸狩ヲナセリ、又鞍馬山、梅ノ尾神社、祇園、清水、金銀閣、三十三間堂等大抵ハ遊覽セリ、二条城内宿舎ノ他ノ中隊長ハ西村某―惣髮ノ鬘、^{ヤフニツマミ}偏視、ノ面白キ人―、小隊長ハ本間絢次

郎―後他家ヲ継ギ蜂屋貞幹トイフ、予ガ沼津在住ノトキ氏モ在リ、後紙幣寮今ノ印刷局ニ出仕シ、音信ヲナシ居リシガ近頃絶ヘタリ、死シタルカ、篠木安次郎―氏ハ予ト同年配ノ少年、後横浜市辺ノ警察署ニ勤仕セシカ―アリ、予ガ舍宅ノ柱ニ日数ヲ算フル穴アリ、是レハ在番ノ士一ケ年間城外外出禁ゼラレ、日一日ト帰京ノ日ヲ指折り算フル代リニ毎日棒ヲ穴ニ挿込ミ順ニ進マシメ穴ノ終リニ近ヅクヲ案ミシトイフ、其在番無聊ノ程モ察セラル、予父モ若シヤ此予舍宅ニ居ラレシヤナドト懐旧ノ情切ナリシ、將軍慶喜公初メハ桑名藩邸―神泉苑近クカ―ニ在ラセラル、予屢其警衛ニ当リ表門又ハ練兵場ノ門脇に舍營セリ、公ハ馬術ニ長セラル、―諸芸ニ堪能アラセラレ、小銃ニ巧ニ絵画ヲモ能クセラル書モ亦―、騎兵ヲ相手ニ「母衣引き」ヲ演ゼラレ兵士モ及バズ長キ母衣、地ニ触レズシテ地ニ平行ス、拙者ノ母衣ハ地ヲ離レズ、後二条城に移ラレ小銃ヲ持タレ、一、二ノ近侍ヲ従ヘテ堀ノ鳥ヲ射撃セラルルヲ拝シタリ、予等ノ舍宅ヨリ高キ石垣ノ上ニ在ラセラルルヲ仰キ看タリ、近侍ノ中ニ新門辰五郎在リトノ噂アリ、果シテ然ルカ否ヲ知ラズ、辰五郎ハ江戸浅草観音ノ境界ナル新門二居ル俠客ニシテ有名ナル者ナリ、召出シテ士分トシテ近侍セシメラルルニ至リシカ、慶応二年十二月慶喜公將軍宣下アリ、廿五日天皇崩ズ、御大葬ノ夜予隊モ御警固トシテ出張ス、悲ミノ中ニモ何トナク殺氣凄々ノ状アリ、同三年十月公政權ヲ朝廷ニ奉還ス、諸士激怒甚ク二条城門ニ至リテ割腹諫止セントスルニ至ル、然レドモ決心カタク遂ニ事ナク大政奉還ス、而シテ抗慨悲憤スル者、二条城内ニ大砲ヲ据エント唱フル者等騒動甚大、慶喜公参内セラルルヤ銃隊ヲ以テ護衛ス、予モ其中ニ在リ、奉還前宮中評議ノアルヤ活將軍ノ称アリシト側聞ス、公ハ在京セラルルヲ不利ト見ラレ大坂城ニ引キ移ラル、此頃京坂地方ニ神符天上ヨリ降り来ルコトアリ、是レ志士等ノ特ニ巧ミシ仕業ニテ夜中屋上ヨリ神符ヲ撒ゼシナリ、以テ人心ヲ煽リシニ又踊リナガラ「エジヤナイカ、エジヤナイカ……」ト唱ヘツ、仮装のノ装束ナドヲ附ケ熱

狂シテ市中ヲ踊リ回ルコト流行ス、神符天降ノコトヲナサシメタト予ニ自白セシ人(海軍大佐伊月一郎後江戸一郎氏)アリ、氏ハ土佐ノ人、其海軍ニアリ後チ兵学校最初ノ洋行生ナリ、兵学校ニテ氏ノ眷顧ヲ受ケタリ、剽軽ノ人、偏視ナリ、皇后陛下ニ拝謁ノトキキヨントシテ御顔ヲ仰視ス陛下微笑セラレシト得意ニ嘖サレタリ、此時江戸ヨリ交代兵着京ス、江原氏ハ砲兵隊ニ転任セラレ、予ガ附屬ノ中隊長代理トシテ福王(名ハ金三郎カ)氏等ト共ニ兵庫ヨリ軍艦長鯨丸ニ乗リテ帰東ス、是レヨリ先キ在京ノ節、大坂玉造ノ營舎ニ在リテ戍衛セシコトアリ、江原氏等ト市中見物セシ時、瓢亭トイフ割烹店ニ飲食セリ、瓢箪ヲ店標トス、又十二ヶ月しる粉店ニ往キ十二碗ヲ飲ミ尽シテ賞ヲ取り見ント滑稽ニモ飲ミ初メ二月ノ梅号ノ極メテ甘キニゲンナリシテ三月号ヲ終ヘズシテ、苦笑退却ス。偕江戸ニ帰りシハ十二月ニテ、予ハ本所緑町ノ兄ノ家ニ在リ、江戸市中ハ混乱ノ状態、薩藩士ガ公然富豪ノ家特ニ浅草御蔵前ナル札差(幕府ノ米倉ハ大川端ニアリ其前ニ米ヲ扱フ商家アリ、札差トイフ)杯ニ押入りテ軍用金ヲ掠奪スルニ至ル、我等憤慨遂ニ三田ノ薩邸ヲ包囲砲撃ス、予ハ柳原通和泉橋ヲ固メ居タレドモ何事モナカリシ、明クレバ慶応四年正月三日伏見鳥羽ノ東西軍衝突徳川「東」軍敗レ、君臣江戸ニ帰ル、敗軍ノ士卒ノ帰東スルモノ、困難、或ハ海或ハ陸、殊ニ陸ヨリスルモノ多ク紀州路ヲトリ其内助ヲ受ケシ談アリ、徳川三家ノ一ナル紀州家ハツイニハ官軍ニ属セシ者ノ当時ハ向背未ダ確定セザリシナラン、当時数藩ヲ除ク外ハ皆然リシ也、予兄徳次郎ハ兵庫?「兵庫カ大坂カ」ニ在勤セラレシガ両掛(道中用―旅行用―ノ荷物箱ニテ棒ノ両端ニ葛籠様ノ箱ヲ挿ミ一人之ヲ荷フ也)ヲ捨テ身ヲ以テ逃レ帰ラレタリ、官軍江戸ニ入ル、此時江戸ノ有様ハ言語道断、急ニ生活困弊、邸第ヲ開キテ商店トシ飲食店ヲ開クアリ、道具店ヲ開キテ家宝等ヲ捨テ売ニスルモノアリ、「しるこ」屋ヲハジメ其お嬢様が給仕女ヲスルアリ、町人ドモガ之レニ引カレテ来ルモノアリ、徳川家士ハ邸外ニ放逐セラレ邸第ヲ

召シ上ゲラル、兄ノ養家溝口家ノ如キ駿河台胸突坂上ノ長屋附キノ大邸、家屋モ広く立派ナルモノナリシガ其俣取り上ゲラル、―後某宮家ノ御邸トナリ居レリ―、荒川家ハ幸ヒ本所ニ在リテ災ヲ脱ル、溝口一家モ本所ノ荒川方に引キ移ラル、後大伯父炊夢（美作守胤央、幕府お先手組頭、諸太夫ノ格、方今ノ勅任ニ方ル、白襟ノ襦袢、布衣以上トモイフ）ハ神田馬喰町ノ西方（左右衛門町）ニテ手習師匠ヲナサレ、巻菱湖ノ門人也、後浅草奥山ニ閉居セラレ、朝野新聞社々員雜報記者（成島柳北先生ト友タリシ也）ナド悠々余命ヲ送ラレ七十五六才ニテ病死セラル、臨終ノ前日予ガ膝ニ椅ラレテ岡本おちかさん（予大伯父岡本平右衛門ノ妻）に微笑シテ曰ク、甥モコンナニ大キク成リマシタカラト満足ノ状ニテ言ハレシガヤガテ大往生ヲトゲラレタリ、芝立行寺ニ葬ル（大久保彦左衛門ノ墓アリテ有名ナリ）後之レト同穴ニ妻たん、兄善補ノ遺骨ヲ埋葬ス、重豊重平重秀三人ニテ石碑ヲ立ツ、慶喜公ハ謹慎ノ野寛永寺塔中ニ閉居セラレ、家臣ニ諭サレ、官軍ニ抗スルヲ戒飾セラレ、従ハザル者ハ「刃ヲ予ガ腹ニ加フルガ如シ」トマデニ示サルレドモ血氣ノ者ノ従ハズシテ脱走スルモノ相續タ、四月初旬予モ脱走ト決シ溝口大伯父ヨリ刀ヲ賜フ、母等ニモ暇乞ヲナシ、上野谷中天王寺ニ夜中集合シ一隊―大手前屯所ノ歩兵？―ト共ニ本所向島曳船通りヨリ鴻台総寧寺ニ宿陣ス、隊長ハ加藤平内氏―下谷青名横丁ハ三千石？、号合衆―、関宿ヲスギ諸川ニテ戦争アリ、我隊勝ツ、此日予ガ隊出デズ、同十七日―東照宮ノ祭日ナリ―、小山駅ニテ官軍ト戦フ、初陣ナリ、官軍ハ附近ノ笠間藩等ノ兵、加藤氏抜刀シテ先ニ進ム、予ハ隊ニ附キテ街路ヲ進ム、飛弾ヒユ―、町端ニ至ル、退却ノ止ムナキニ至ル、予ト下士ト共ニ一旦退キテ町家ノ畳ヲ以テ胸壁ヲ急造シ暫時ニシテ再ビ進撃ス、滝川充太郎氏ニ逢フ、彼レ頭取ノ裏金陣笠ヲ冠リ例ノニコ―顔ニテ「ヤー敬サンモ来タナ」ト悠然タリ、（滝川氏ハ播磨守ノ男、小川町屯所ニテ同僚、仏蘭斯式伝習隊ニアリシ人。大川庄次郎氏ト併ビ称セラレタル勇将、後鹿兒島戦争ノトキ

大尉ニテ敵ヲ追ヒ深入リシテ打死ス、明治ノ復讐ノ意味モアリシカ。中隊全滅トカ聞キシガ軍令違反ナリシカ賞曲ニ漏レタリト、惜シキ勇士ナリ、令弟滝川具和氏ハ海軍少将、支那通ノ人、久シク支那内地ニ入り込ム、ベルリン駐在武官大佐ノ時、予ガ欧米巡回ノ序、同市ニテ厚遇ヲ受ク、今ハ故人）。朝ヨリ午后ニ至リ遂ニ勝ツ、予ガ畳ヲ楯ニ防ギシトキ敵ノ大砲ノ彈丸破裂シテ断片左手ノ甲ニ当リシカ負傷モセズ微傷ヲモ負ハズ、川辺光？造氏アリ（下谷辺ノ医者ノ子トカ、二十才以上ノ青年士官ナリ、予ト同隊ナリ）、予ト相知ル、此日兩人始終進退ヲ共ニセリ、此日脱兵ヲ総ベシハ大島圭介氏、此日捕虜ヲ刎首セリ、敵ノ探偵、変装セシ者、小柄ノ中老人ナリ、笠間ノ藩士トイフ。夜ニ入りテ本陣ナル旅舎ニテ軍議アリ、予モ出席ス、半隊長ヨリ小隊長ニ進ム。兵士等民家ニ入り掠奪ヲ始ム、予モ鎮撫ノ為メナリシカ質舖ヲシキ家ノ倉内ニテ兵士ノ掠奪ヲ叱責セシ様ニモ覺ユ、夜中行軍結城ノ城下ニ宿陣ス、此日ノ疲労ノ為メニ睡眠ヲ催スコト甚シク歩行シナガラ眠リ城下ニ入り思ハズ地上ニ臥シ眠ルニ至ル、翌日合戦場宿ニ宿ス、夜哨兵ヲ駅内ニ配置ス、同宿ニハ遊女（所謂ル宿場女郎又ハ飯盛アリ）。宇都宮ニ向フ、大島圭介等同城ヲ攻メ大ニ官軍ヲ敗リ城陥ル、我隊到レバ落城ノ後ナリ、城門ニ入りシニ枘形ノ内ニ首ナキ敵士野袴ヲ着シ袴帶ノ間菓子ヲ夾ミアリ、死体散在ス、城内ニ入り藩士ノ一家ニ入りテ宿ス、家材道具一切其俣ニ有リ、川辺氏等ト家探シシテ草紙ナドヲ読ミ食物ヲモ探シ出シ休息シ城内ヲ巡視セシニ牢獄ニハ囚人有リ、予等ニ哀ヲ請ヒ低頭平身ス、一宿ノ後、予ハ城東街道ノ入口ニ備ヘ官軍ヲ待チ胸壁ヲ急造ス、官軍大挙シテ来襲ス、此日ハ薩軍等モ来リ会ス、故ニ官軍勢盛ン也、初メ予ハ一隊ヲ率ヒ郊外ニ在リ東方雀宮方向ニ少ク進ミシガ遙カニ街道ノ松並木ヲ楯ニトリ乍ラ敵ノ来ルヲ見ル、乃チ発砲ス、敵ハ薩兵―其軍帽ハ鍋形ニテ俗ニ「ナベカブリ」ト嘲リタリ―ト覺ユ、街道ノ右側ナル麦畑ヨリモ進ミ来ル、敵ハ元込ミ銃ニテ連発シツ、来ルニ我兵ハ「ミニ―」トイフ口込

メ銃也、数発ニシテ銃身熱シ弾丸ヲ込ムルコト甚タ難ク丸軌ンデ入ラズ。乃チ退キテ胸壁ニ依リテ防戦スレドモ遂ニ支ヘズ城ニ入ラントスルニ城外ニ潜伏シ居タル宇都宮藩士ナランカ我ニ向ツテ発砲ス前後夾撃セラルルノ苦境ニ陥リ、予ハ二、三ノ兵ト共ニ右方麦畑ニ脱ガル、敵進撃シ来ル、飛丸雨ノ如シ、同僚某傷キ倒レ絶叫シテ援ヲ呼ブ、予ハ歩兵ト共ニ取ツテ返シ同氏ニ肩ヲ貸シ辛フジテ逃ル、困苦ヲ極ム、敵長ク追ハズ、途中農家ノ戸板ニ乗セ兵卒ト共ニ担フ、民舎ニツキテ薩摩芋ヲ得テ食ニ充テ、鞍掛山下ヲ過ギ夜半徳次郎宿ニ達ス、脱兵ノ宇都宮ヨリ敗退シ来ル者、前スデニ此宿ニ宿泊シ居リシ者、予ガ兵ノ来ルヲ敵ノ夜襲ト誤リテ一時騒動ヲ起セシガ味方ナルヲ知りテ静マリシ滑稽アリ、小山駅ノ戦争ニハ初メコソ恐ロシカリシガ勝ヲ得テハ愉快ヲ覚エタリ、^(朱書)「然ルニ」此日敗軍トナリ敵ニ対向中ハ別ニ恐怖心モ無カリシガ利アラズシテ退キシ時ハ実ニ恐ロシカリシナリ、敵弾ガ耳ヲ掠メヒユウ／＼ト鳴リ麦ノ穂ニ当リ其中ヲ腰ヲ屈メテ這フ様ニ走ル苦シサ、其中ヲ同僚ノ負傷者（小花和某ニテハナキカ確ト記オクセズ、徳次郎駅ニテ療治手当テセシトキ其傷ハ股ヨリ足ニ入り腓ノ辺ニテ脱出シ軽少ナリシ、此人負傷當時救ヲ呼ビ「ピストル」ヲ擬シテ部下ノ兵士ニ迫リ居リ、予等赴キテ之ヲ助ケシナリ）ヲ荷ヒナガラノ困苦ハ一ト通ニアラズ、落ウ人ノ風声鶴涙ニモ驚クト云フコトヲ体験セリ、此日城内ノ我兵遂ニ敗ラレ城再ビ敵手ニ帰ス、宇都宮藩士ハ初メ城陥リ城外ニ潜伏シ居リ、新来ノ官軍ト呼応シテ城ノ内外ノ我兵ヲ攻撃シタルナリ、故ニ予ガ城内ニ向ヒ逃レ入ラントセシトキ不意ニ藪林ヨリ発砲セラレ夾撃セラレテ遂ニ前述ノ如キ状態ニテ逃走セシナリ、此日ノ戦争ハ激甚ナリシ由、其次日日光山下鉢石町ニ宿陣ス、脱兵皆集ル、山内寺院―宿坊トイフ、諸大名ノ宿泊スル寺―并ニ町家ニ宿ス、予ハ某家ノ二階ニ在リ、我所属大隊ノ會計掛大野亀三郎ナル者、隊附キノ公金ヲ奪ヒ其跡ヲ晦ス、此ノ如キ不義非道ノ士、惡ミテモ余リアリ、一日鉢石ノ宿舎ニ在リ川辺光造氏曰ク、予レ脱兵ノ状ヲ見ルニ徳川

氏興復ノ事思ヒモヨラズ、會計吏ニシテ其保管金ヲ奪ヒ逃避スルガ如キ言語道断、予ハ見込ナシト決シ江戸ニ帰ラント欲ス、郷ハ少年徒ニ命ヲ捨ツベカラズ若シ婦志アラバ同行セント論サル、予当年十七才、唯々夢中ニ脱走シテ徳川家恢復ノ為メ又自ラ大名諸侯ニモ成ラントノ血氣ニ速リ向見ズノ浅慮ヨリシタル者、川辺氏老成ノ説ヲ聞キ夢ノ醒メタル如シ、乃チ共ニ帰ルヲ約ス、幸ヒニモ予母ノ実兄正木留次郎ノ次男新作氏ハ僧トナリ累進シテ日光山薩侯宿坊祐乗院之主たり、予川辺氏ト宿舎ヲ出デ祐乗院ヲ訪ヒ潜伏ヲ乞フ、院主承諾、一室ヲ貸ス、脱兵既ニ此寺ニ宿舎シ居タリ、此時ニハ敵兵ハ勿論ノコト、仲間同志ノ脱兵ニ見出サレンヲ恐ル、敵味方共ニ恐怖ノ者トナル、人ハ決死スルト恐ルル者ナク、助カラントスレバゾ風声落葉ニモ愕カサル、一夜脱兵近室ニ在リテ談笑スルヲ聞キ両人合掌シテ神仏ニ捧ルニ至レリ、―川辺氏ノ守リ本尊ノ仏神カ何カノ図ヲ壁ニカケタルヤウニ記臆ス―、人窮迫シテ拠ル所ナキニ至レバ神仏ニ頼ルニ至ル、既ニシテ脱兵皆山越シニ会津ニ向フ、官軍モ未ダ迫ラズ、日光附近、一兵ナシ、乃チ共ニ祐乗院ヲ辞去シ足尾ヲ経テ御子内村ニ至ル、脱走ノ士―歩兵ニアラズ―、草風隊―彰義隊等ト同ク何隊何隊ト称シタリ―、此村ニ宿陣シ哨兵予等ヲ誰何ス、乃チ用意ノ書翰ヲ出シテ之ニ示ス、此書ハ祐乗院自筆ニテ予等二人ハ親戚ノ者、戦争前江戸ヨリ来リ安否ヲ訪ヒシ者、滞在中戦争起リ帰江スルヲ得ズ、戦止ミタルヲ以テ帰スナリ杯ノ文意ナリ、彼等之ヲ疑ヒテ通過ヲ許ルサズ、其中露頭セシヲ恐レテ忽々、元来シ道ニ引キ返ス、去ルコト数十歩、喇叭ノ音響キ渉ル、二人急歩シテ逃ル、喇叭ハ威喝カモ知レヌガ自分ニハ甚ダ狼狽セシメヌ、漸ク遠ザカル大ヒニ飢工民舎ニ入りテ食ヲ求ム、稗飯ヲ大碗ニ盛りテ与ヘラル、辛フジテ一碗ヲ嚥下ス、飢胃モ受附ケザルホドノ不味ヲ覚ユ、途中一泊シ、翌日復タ祐乗院ニ戻ル、初メ同院ヲ出ルヤ羽織着流ノ姿ニ大小ヲ帶ス、再ビ同装ニテ寺ヲ辞シ此回ハ本街道、日光街道、ヨリ右折シテ高峯ゲ原ノ道ニ入ル（高峯ヶ原ハ天狗奉祭ノ社殿ノ

アル有名ノモノ也）一河ノ流ヲ徒渉シ往ク／＼馬上ニ跨ル農夫ニ逢フ、彼レ急に下リ立チテ去ル、川辺氏曰ク「クチナシ馬」ダカラト云フ、予誤リテ云フ「黄色馬デハナシ」氏大笑シテ云フ、君モ「迂闊ダナ」クチナシハ「口無シ」ニテ馬ニ別当一馬丁ノコトナク独乗スルコトヲ許ルサヌハ幕府ノ禁制ナリ、「クチナシ馬ニハノルベカラズ」ノ一条アリ、口トハ馬ノ口ヲトル意ヲ示ス、此日路傍ノ一軒ノ田舎旅舎エ泊ス、翌朝出立ノ前ニ一人総髪ノ者、総髪トハ前髪ヲ剃ラズ當時医者神主修験者ノ所謂ル「慈姑ノ把手」ナル髪髻ヲ云フ、方今モ後家（未亡人）ニハ往々此髪ヲミル、二階ヨリ降り来リ吾等ニ云フ様ハ、此先キノ鹿沼辺ノ本街道ニハ官軍閔ヲ構ヘテ旅人ヲ調べ改ム、卿等ハ怪シムベキ人ニテハ無カルベキモ安心ノ為メ間道ヲ行ケト、二人謝シテ出ヅ、川辺氏曰ク彼ノ言怪ムベシ、如カズ其裏ヲカキテ本街道ニ行カントテ鹿沼ニ入ルニ関所杯更ニ無シ、彼恐クハ其筋ノ手先ニテハナキカ、川辺氏ノ先見ニ敬服ス、予ノ今日ニ至リシハ実ニ同氏ノ賜ナリ、夫レヨリ栃木町ニ入り某商家ノ店前ニ憩フ、此町ノ中央ニ溝アリ清水流ル、此商家奥行長シ、今ヨリ思ヘバ阿部家デハナキカト何トナク感慨無量ナリ、栃木ヨリ陸羽道中、野木宿ニ至リ吾兄重豊氏ノ岳父福島長左衛門氏ニ至ル、氏ハ此村屈指ノ豪家、名主ヲ勤ム一方今ノ村長、氏厚ク庇護ヲ加フ、其家ハ街道ニ在リテ危険ナリ、乃チ予ガ伯父一父ノ実弟、古河城内頼政大明神ノ祝渡辺織江一初名弥門一氏ニ頼リ、遂ニ大崎村ノ名主治右エ門氏ノ家ニ潜伏シ居ルコト数日世間ノ様子ヲ探リ街道ノ行旅危険ナキヲ知ル、治右エ門氏ハ任侠ノ風骨アリ、好ク予等ヲ遇ス、家ハ利根川ニ枕ム、自カラ舟ヲ操リ予等ヲ渡ス、今回ハ服装ヲ変ジ大小刀等ハ福島氏ニ預ケ前髪ヲ剃リ農夫様ニ出デ立チ箒ヲ冠リ治右エ門老ニ謝別シ本街道ニ出デ途中某村某氏ニ宿ス、此家ハ川辺氏ノ親戚ニテ手習師匠ナリ、千住宿ノ関門ノ撤去セルヲ確知シ、ビク／＼モノニテ無事本所緑町一方今モ予兄ノ所有地ナリ一ノ兄家ニ帰ル、初メ生還ヲ期セズシテ母等ニ訣別セシガ、スゴ／＼

ト今更ラ面目ナキ心地ス、四月初旬脱走シ五月ニ入り家ニ帰ル、此間一月許、既ニシテ官軍彰義隊ヲ上野ニ攻メ敗ル、五月十五日ナリ、朝ヨリ砲声殷々、雨声ト相応ズ、予等數人、河津駿河守一此人ハ欧州ニ使シ名アル武士ナリ一邸ニ至リ主人ニ面会シ夜ニ入りテ同志ト共ニ大川（隅田川）ヲ渡リテ彰義隊ニ応援スルノ計画ヲ以テシ同君ニ迫ル、同氏大ニ叱責シ其無謀ト世ノ形勢ヲ論サレ、唯々トシテ止ム、予伯父勝五郎氏ハ（朱書）父ノ異母弟、幼ヨリ里子ニヤラレ農家ニ育チシガ家ニ帰リ文武ヲ励ミ一歩兵士官トナリシガ彰義隊ニ入り黒門口ニテ奮戦セシ由、性胆勇頼モシキ人ナリ、後星野家ヲ継ギ駿河ニ移リシガ明治十年前ニ病死ス、幾許モナク徳川氏ノ封定リ駿河伊豆及遠江ノ一部、七十万石ヲ賜ハル、田安家ヨリ亀之助公一今ノ貴族院議長家達公一入りテ宗家ヲ継ガル、静岡城ニ移ラル、静岡藩是レナリ、旧幕臣ハ農ニ帰スルアリ、商ヲ営ムアリ、朝臣トナルアリ、思ヒ／＼ニ四散シ封地ニ從行ヲ願フ者モ多シ、無禄ニテ移住セント云フ藩邸ニテモ成ルベク隨行者ヲ避ケラレタリ、是レヨリ先キ予ハ免官トナル、御人減ニ付御役御免被仰付候旨緩雄殿（服部氏）被仰渡候依之申渡、兄溝口善補ニ計リ其意見ニヨリ江原鑄三郎氏一維新後素六ナリ一ヲ其私宅新宿某町ニ訪ヒ再ビ陸軍出仕ノ周旋ヲ請フ、氏曰ク下士官ナラバ如何、予曰ク元ヨリ無禄移住主家ニ仕ヘン覚悟ナリ下士ニテモ何ニテモ可ナリト、乃チ明治元年七月廿九日左ノ命ヲ拜ス、一支配徳次郎弟荒川敬二郎 小筒組差役下役並被仰付之 右者河野左門殿被相達候ニ付申渡之、其頭取ハ小西某、同僚ニ吉田一郎アリ、予ハ移住者ノ住家ヲ沼津地方ニ割り当ルノ任ヲ帯ビ吉田氏等ト共ニ先発シ沼津ニ至リ桃郷ナル志下村ニ小西氏ノ僑居ヲ農家ニ撰定ス、徳川氏ノ旧誼ヲ説キ快ク借室借家ヲ呈供センコトヲ勧誘シテ各家ヲ訪問シタリ、長兄溝口善補ハ差役頭取ニシテ同ク沼津移ス幸ヒニモ志下村某農家一此家ハ方今静浦館ノアルトコロ御用邸ノ浜続キ也一ニ寓居セラル、予之ト同居ス、兄ニハ妻常、長女たつ、乳母某、其幼女某也、一始メノ借室ハ村

ノ長老渾名「ナカンデヨウ」ト云フ者ノ一室、後其近クノ某氏ノ一室ニ予ト共ニ七人雑居ス、半年前ハ駿河台胸突坂上広麗ナル邸宅ニ居テ荒ラキ風ニモ当ラザリシモ嫂等ガ今ノ有様ハイカン、徳川氏封ニ駿河ニ移リ兵学校ヲ沼津旧城内ニ設立ス、一此城ハ水野家ノ本城ニシテ同家ハ下総ノ菊間ニ移サル、幕臣ノ学識才芸アル名望家多ク集ル、兵科ハ仏国式ニ則リ歩騎砲ノ三兵也、学科ハ漢籍、英仏語、数学三角法マデ、画学、地理、測量等方今ノ中学程度ノモノ、方今陸軍教育ノ基礎実ニ沼津ニ在リ、創立計画者ハ阿部邦之助、後潜トイヒ豪傑肌ノ人、一旦官吏トナリ野ニ在リテ新規ノ事業ニ着手シ可惜失敗ニ終ラル、江原素六、此トキ静岡藩ノ少参事乎ト思フ、両氏、校長ハ西周、後朝廷ニ徴サレ陸軍省ニ出仕セラレ山県有朋氏ノ親任ヲ受ケ兵科教育ノ基礎ヲ立テラレタリト云フ、男爵ニ除セラレタルヲ以テ知ルベシ、所謂「袋刀」ト称スベキカ、今海軍中將西紳六郎男ノ養父也、元福井藩ノ人、周之助トイヒ維新朝廷ヨリ官名禁止ノ命令出ヅ静岡藩ニテハ朝命維レ従フノ際トテ何之助ヲ何ト改メ又ハ何之助改メ何之丞何衛門……等モ同様ナリシガ普ネク行ハレズ依然改メザル方多シ、教授大築尚志、佐倉藩ノ人、初メ医学ヲ修メラレ、後兵科ニ入ル、後朝廷ニ徴サレ陸軍大佐トシテ砲兵工廠ノ創立者、提理ノ官名ナリシト覚ユ、少将ヨリ中將ニテ没セラレシカ、赤松大三郎、後則良、幕府ノ人、榎本武揚、沢太郎左衛門等ト和蘭ニ留学シ海軍々事修業、朝廷ニ徴サレ海軍大丞トシテ海軍兵学校ノ創立計画ヲ立ツ、後少将ノトキ台湾征討ニ従事シ、男爵ヲ授ケラレ（最初ノ）三万円トカノ世襲財産ヲ賜ハリシト云フ、中將ノトキ退官、野ニ在ツテモ東京市ノ水道事業ノ長トナリ、又旧幕府ノ子弟ノ為メ教育業ヲ創立シ方今ノ育英会ノ基礎ヲ作り、明治十八年創立、予ノ呈出セル育英会ノ名採用セラル、此頃旧加州藩ノ創立セル育英会アリ、旧各大藩ニハ同種ノ会漸次設立アリ、此事ノ起リハ予等（永峯秀樹、中川将行等）ノ主唱ニテ海軍々人ニシテ旧幕臣ノ勢力甚ダ微ナルヲ慨シ後継者ノ養成ヲ思ヒ立

チシヨリ始マル、後陸軍々人等ノ志願者ヨリ漸次変遷シテ当今ノ如ク静岡岡県人及旧幕臣縁故ノ者ト改マル、其主唱ハ予ナリ、総会ニ呈出シテ其議決定シタリ、今ハ総裁ニ徳川家達公、理事長ニ平山成信男也、平山氏ノ尽力甚ダ大ナルモノアリ、高島氏、四郎太夫秋帆ノ子、朝廷ニ徴サレ陸軍大佐トシ熊本神風連ノ乱ニ殺害セラル、田辺太一、外務省ニ徴サレテ大丞トナル、蓮舟ト号シ詩壇ノ名家、宮本小一氏ト共ニ外務省アリテ名ヲ知ラル、乙骨太郎乙、先生モ徴サレテ大蔵省海軍省ニ出仕セラレ専ラ翻訳ニ従事セラル、先生ノ父君ハ有名ノ儒者耐軒先生ナリ、中根淑、徴サレテ陸軍少佐トナル、漢籍国文ニ長ズ、陸軍学校ノ地理教科書ヲ編述シ鳥羽伏見ノ戦争ニ東軍西軍トス、鳥尾小弥太將軍之ヲ排斥シ賊軍ト改メシメントス、先生屈セズ遂ニ改メズ其主張ヲ貫ク、後野ニ在リテ博文館ノ顧問役トナル、先生ノ詩文集香亭藏草、行脚非詩集、天王寺夜話？アリ、性剛直、人ニ接スル穩厚、予最モ敬服セリ、乙骨先生ト交リ最モ深シ、渡部温、英文ノ師、後製鋼所ヲ創立シ富豪トナル、山田昌邦、開拓使ニ出仕、札幌農学校数学ノ師トナリ後渡部氏ノ製鋼所ニ入り渡部氏死去ノ後其所長トナリ是亦富有ノ人トナル、山本俣儀、海軍兵学校ニ出仕シ大佐ニテ退官、予其厚誼ヲ辱フス、常ニ兵学校ニ奉仕ス、神保長致、沼津小学校々長兼兵学校教授、後陸軍士官学校？数学教官、博士小虎氏ノ父、石橋好一、海軍兵学校ニ奉仕ス、某年校員ノ忘年会アリ、会場ハ向フ両国ノ中村樓ノ階上大広間ナリ、酒興ノ余先生ト予ハ相撲ノ戯技ヲナシ先生倒レ予其上ニ亦倒ル、先生立テズ膝骨ヲ折ル、大ニ驚キ担架ニテ陸軍病院ニ入ル、予之ニ随従ス、其後数日ニシテ本復セラル、後江田島ニ在勤、予モ因島ニアリテ厚誼ヲ受ク、其名ノ如ク好々ノ人、平岡幸作、兵式体操等ノ師、後陸軍大佐、徳川公宗家々令トナル、黒田久孝、予ト同処ナル本所緑町ノ人、旗本ノ士、予ヨリ長ズ、幼少ノトキノ友、陸軍ニ出仕、砲兵大佐トシテ日清戦争營口？ノ大戦ニ功アリ、男爵ヲ授ケラル、中將？ニテ没ス、岩浪某、宮内省

二出仕、主馬寮技師―、並木元節^{モトノキ}馬術ノ師、予馬術ヲ好ム、三島宿原、吉原宿辺マデ学生一隊ニテ遠乗リヲ為ストキ先生ノ指導ニテ快速、今尚ホ覚ユ―、榊令一―洋画ノ師、榊緯博士ノ父君―、万年千秋―砲兵科、陸軍砲兵少佐?後沼津ニ在住セラル―、此外数人アリ、席次次第不同ナリ、同方会記事ニ在リ参考トスベシ。予ハ兵学校生徒(資業生トイフ)タラントテ受験準備トシテ算術ヲ山下守衛氏^{モリヱ}ニ学ブ、―此時ハ志下村ヲ去リ我入道村牛臥山下ノ某寺ニ兄ト共ニアリ―、明治二年二月十日左ノ命ヲ拜ス〔荒川敬次郎 去辰十二月中被命候趣ニ付其身一代被召出依之申渡〕―俸禄ハ三人扶持ナリ、仲兄重豊ハ朝廷ノ直臣被 仰付、此時東京府所管ノ士族トナリ旧邸本所緑町三丁目廿一番地ニ在住ス、予ハ徳川藩ニ従フ故ニ藩公ノ命ニ依リ終身藩士ノ列ニ入ル、最下級三人扶持ニテ三等勤番組トナル、五人扶持ハ二等、夫レ以上ハ一等ナリシナラシ、同村ニハ鈴木三郎―後島田家ニ入り有名ナル代議士―氏アリ、予ハ漢籍ノ教ヲ受ケタル様記憶ス、入校試業ヲ受ケ、読書、算術、作文ト覚ユ、作文題ノ中チ兵士ニ刑罰申渡シノ文ト弟ノ大酒ヲ戒シムル文ヲ記憶ス、第一ニハ「其方義酒興ノ上トハ申ナガラ上官ニ対シ不敬ノ段不届ニ付何々申付ク」―等ナリ、四月三日城内ナル学校―旧水野侯御殿ヲ其俣校舎教場トス、粗末ナル板ノ長椅子ニヨリ始メテ黒板ニ白墨ノ字ヲ見ルニ至ル―ニ出頭シ左ノ辞令ヲ受ケ〔荒川敬二郎 試業合格ニ付資業生被 命候旨綾雄殿被申渡依之申渡〕、此「受領」前ニ教授方居室ノ隣室ニ坐ス、何心ナク話談ノ声洩ルルアリ、曰ク「荒川トイフモノアリ中々ヨク出来ル」―ノ如キヲ聞ク、心嬉敷ク今ニ忘レズ、資業生学費トシテ「毎月」金四兩ヲ賜フ、予ハ三人扶持ト四兩ノ月入アリ、独身ナレバ何不足ナシ。英学ヲ渡部先生ニ―先生嚴格ヨク教ユ、豊面肥大、「ウエブスター」ノ大辞書ヲ抱ヘ教鞭ヲ持シテ微笑シテ入場セラル、同級ニハ永峯秀樹(矯四郎)、中川将行(錠蔵)、矢吹秀一(常造?)、石井新八、兄溝口善補(衛)、真野肇(初覚之丞)、田付直男、吉村幹、中村某、等

十数人、同方会々誌ヲ見ヨ、先輩ナル第一期生ニハ佐々木慎思朗、芳賀伝^ヱ、西尾祐三郎、等数人ノ組アリ、其教科書ニ経済学ノ小冊子アリ、予等数人撰出セラレテ其聴講ヲ受ケ、講師ハ渡部先生ナリ、初メテ経済ノ原理ヲ聞キ世ニ此ノ如キ学アルカニ敬服シタリ、此英学科ニテ内外地理「ヂヨンゴイス」氏ノ地理書ニハ天文ノ概略モアリ、窮理書「クエツケンブス」ノ物理学、パーレー氏ノ万国史等新知識領得ニハ面白キコト「限りナシ」―、数学ヲ神保先生ニ―算術、代数、幾何、三角測量迄、教科書ナク筆記ナリ、蘭書ガ根本ナレバプリユス、ミニス杯ノ語ヲ用フ、測量ニ「ブーソル」測器ヲ使用セリ―、漢書ヲ田辺先生ニ―「瀛環?」史略ノ講義ヲ教授セラル―、歩兵科ヲ平岡先生ニ―仏式体操ヨリ練兵ニ至ル―、砲兵科ヲ万年先生ニ―何斤カノ砲車使用打方等―、騎兵科ヲ並木先生ニ―初メハ「鎧無シ」ニ乗馬ス、コロリコロリト落馬ス、時々「鎧付ケ」ニテホット一息、又々「鎧取レ」ニテコロリコロリト落ツ、漸ク慣レテ愉快ヲ覚エ遂ニハ外出遠乗スルニ至ル―、洋画ヲ榊先生ニ―初メハ物品ノ写生、後家屋等ニ至ル、鉛筆ヲトリ手ヲ伸シ物ノ長巾ニ当テ、之ヲ紙面ニ模写スルヲ初メトス―学ブ。後乙骨先生ノ塾生トナリ同君玄関脇ノ一室ヲ修繕シテ居室トス、同塾ニ田口卯吉、小柳津要人、堀田徳次郎、吉田丹蔵氏アリ(田口卯吉氏ハ初メ医学ニ志シ静岡市ニ往ク、後大蔵省ニ出仕シ、野ニ下リ経済雑誌ヲ起シ有名ナル著者、代議士トナル、爰ニ記スルニ及バズ)、小柳津氏ハ丸善書店ノ人トナリ後支配人、此店ニ大功アリ、元岡崎藩ノ人、箱館ノ役ニ榎本氏ノ幕下ニアリテ戦ヒシ人)堀田氏ハ鹿兒島藩に招聘セラレ教師トシテ赴キシガ後病死ス)、吉田氏ハ民間ニ在リ風流氣ノアル人ニテ今尚ホ健在(昭和二年)、先生ニチャールス五世伝ノ講義ヲ受ケ、先生ノ発音ハ正シキ故、自然コレニ慣レ或日「学校教場ニテ予ガ英文ヲ読ミテbut「バット」ト発音セシニ先生曰ク「バット」デハナイ「ブット」トイフベシ、予ガsphereヲ「スフィーヤ」トイヘバ矢吹氏ガ「スベヘル」トイフナド、中々面白カリシ、此

発音ニ付「^(朱書)一話アリ」、予ガ江戸ニ在リシ時分、仏語ヲ習ヒシニD's
mois variables chapitre Premier ヲ先ツ「デス、モツ、ハリヤブレス」「シ
ヤブトレ、プレミエル」ト唱へ、次ニ訳シテ曰ク「変スベキ言葉ニ附イ
テ」「第一章」ト、当時林正十郎氏ナル蘭学者ガ仏文ヲ教エシニ発音法
ヲ知ラレズ綴リニ従ツテ読マレタルヲ以テ右ノ如クナリシト記憶ス、予
杉田氏ノ蘭学事始ヲ読ミ当時篤学ノ先輩ノ苦辛ニ感激セリ、林氏ノ如キ
亦此例ニ洩レズ、在沼津中ノ概略ヲ記サンニ予等敗軍者ハ新タニ陣容
ヲ立テ直シ雪辱ヲ期ス、故ニ奮励努力セリ、生徒ノ如キ初老ニ近キ者モ
アリシガ「山高キガ故ニ貴カラズ木アルヲ以テ貴シトナス」ト実語教ヲ
教ヘ授ケラレ懸命ニ勉強スル有様ナリ、小学校モ設立セラレ、皆洋式ヲ
折衷ス、ヤガテ沼津兵学校ノ名響キ渡リ、他藩ヨリ来学スルモノアリ、
当時ニ在リテ方今ノ中学程度ノ學術ヲ授クルモノ沼津ヲ以テ首トス、故
ニ教授方并ニ生徒ヨリ鹿児島藩土佐藩ニ招聘セララルモノアルニ至ル、
蓮池新十郎先生、山田昌邦先生……生徒ニテハ堀田徳次郎氏ノ如キ数人
アリ、操練用トシテ貸渡サレタル小銃「ゲベル」トテ旧式ノ先込メ
式ノモノヲ以テ獵用ニ供シ―鉛ニテ散弾ヲ自製ス―、屢々郊外ニ出獵
セリ、旧来愛鷹山ニ馬ヲ放牧スル、之ヲ捕狩スル為メニ兵学校資業生
ヲ以テ勢子ノ一部トシ、教授連モ出張ス、各人竹竿ヲ両手ニ持シテ連絡
シ包囲シ終日山中ヲ獵リ立テ牧馬ヲ漸々ニ一定ノ埒内ニ追ヒ込ムナリ、
牧師ハ馬ニ乗り網ヲ輪ニシテ牧馬ノ首ニ投ゲ巧ニ之ヲ引キ寄せテ捕獲
シ、人夫ハ馬ノ口ニ附キ添ヒテ驚キ狂フ馬ヲ里ニ出スナリ、其技ヲ見ン
トテ埒ノ土堤等ニ見物人近郷近在ヨリ群集ス、予モ勢子ノ一人トナル、
馬群ニ首長アリ、其馬ハ先頭ニアリ若シ包囲ヲ破レバ他ノ随従スル者モ
同時ニ脱去ス、白馬ノ首長アリ、此時モ遂ニ脱出シタリシト云フ、此行
事ハ後廢止シ、牧馬モナシト云フ、或時教練ノ為メ生徒隊ハ静岡市ニ
行軍旅行シ、藩主龜之助公檢閲セラル、^(朱書)「御庭前ニテ拝跪ス、終リテ」
旅舎ニ入り、遊戯雜鬧ス。偕世事変遷ニ從ヒ散髪スル者相繼ぐ、沼津ニ

テモ教授方生徒等決行ス、予モ乙骨先生方ニテ一朝同塾生ト共ニ互ヒニ
断髪ス、井戸端ニテ洗沐シ、頭ヲ撫シ、何トナク淋シキ心地セリ、奇妙
ナルモノナリ、先生ノ宅ハ城内ノ西南隅ノ邸宅、旧藩上士ノ居宅ナラン。
母堂ハ耐軒先生未亡人ニテ温厚ノ婦人、予等ヲ好遇セラル、自作ノ芋等
食膳ニノボル、味美ナリシヲ覚ユ、令室ハ杉田レイ卿ノ姉妹？、是亦貞
淑ノ婦人、杉田玄端氏ノ親戚ナリ。一日夕刻水泳ノ為メ―水泳修行モ大
分進歩セルタメ―千本松原ノ海岸ニ出デ海ニ入ル、是迄狩野川ノ淡水ニ
テ修行セル故海水身体ヲ輕クシ不知／＼沖ニ出デ余リ遠キニ心附キ緩々
泳ギ帰リ上陸セント岸ニ到ル、怒濤ノ為メ打ち上ゲラル、立タントスル
ト引キ浪エ誘ハレ沙上ニ引ツラレテ立ツ能ハズ、又寄せ浪ノ為メ打ち上
ゲラル、大ヒニ狼狽シ全力ヲ出シ砂中にシガミ付キ辛フジテ止マリホッ
ト一息シ、忽々ニシテ帰塾セリ、夕刻ノ事トテ人モ居ラズ危ウキ事ナリ
シ、又狩野川ヲ横断セントテ溪流ニ抗シナガラ向岸ニ近ツキシガ「^{コムラ}戻
リ」ラシク脚突ツ張り泳ゲス沈ミ乍ラ脚大^{アシノオホヒ}ラ曲グ、因ツテ自由トナリ
対岸ニ泳ギ着キタリ、此方法ハ嘗ツテ聞キ覺エタル故、幸ヒニ没溺ヲ免
レタリ、沼津ハ勿論其近在村々ニ藩士ノ仮寓スルモノ多シ、休業中ニハ
出京シテ母上ニ会フヲ樂ミトシ、下駄穿キ、又ハ草鞋ニテ往還ス、大概
大磯辺ニ一泊ス、母ハ兄方ナル本所緑町三丁目二十一番地ニ在リ、予俸
級ヲ受ケシ以来僅少ナガラ御小遣トシテ若干金ヲ呈上シ居レリ、此時分
八月五十錢ト覚ユ、母上ハ之ヲ喜バレタリ、予ガ父親トナリ、子供ヨリ
何品ニ限ラズ貰ラヒタル喜ビハ格別ナルモノナリ、乙骨先生ハ外遊セラ
レシカ不在トナル、予ハ上土町^{アゲツチ}？狩野川側ノ紙店某氏ノ二階ニ吉田一郎
氏ト僑居ス、老主人ハ眼不自由ノ者、其妻等ノ世話ニナル、吉田ハ下総
某村ノ農トイフ、容貌魁偉性温良、共ニ相励マシ勉学セリ、彼レ粗食ニ
慣レ乾魚ナドハ頭、尾、骨トモニ咀嚼ス、予ハ之ニ反シ肉ノミヲ食フ、
彼レ曰ク「若様育ハ駄目ダナー」ト予ヲ戒ム、予ノ親交セシハ永峰矯四
郎（秀樹）、中川錠藏（将行）、矢吹常藏（秀一）、吉田氏等ナリ、又田

付直男、真野肇（初覚之丞）トモ深交ス。永峯、中川、矢吹、吉田ノ四氏ト相談シ東京ニ出テ、修行シ海軍々人タランコトヲ志ス、即チ其願書ヲ呈出シ、勝安芳氏ニ至リテ願意ヲ述ベシモノニハ永峯、中川、矢吹三氏アリ、遂ニ左ノ如キ辞令ヲ受ク、〔荒川敬次郎 願之趣も有之候ニ付資業生御免ニ等勤番組申付之 辛未八月〕、出京後永峯、中川ト予ハ乙骨太郎乙先生ニ依リ藩邸ナル神田錦町ノ長房ノ一軒ヲ借用ス―此時先生ハ朝命ヲ拜シテ大蔵省ニ出仕セラル―、予ハ囊中ニ三拾円アリ、之ヲ以テ時至ルマデ支弁セザルヲ得ズ、飯米丈ケハ近隣ヨリ炊キテ貰ヒ、副食物ニハ大概菜漬ヲ主トス、乙骨太郎乙先生一日藩邸ニ来ラレ、予等三人ノ有様ヲ見ラレ、牛肉ヲ振舞ハントテ三河町ノ牛肉店（此頃ハ芝、柴井町？ニ中川店、浅草黒舟町辺ニ一軒アリシカ）ニ至リ、充分牛食ハセザレドモ馬食シタリ、其甘味ハ今ニ忘ラレズ、菜食一ヶ月ナレバナリ、赤松先生ハ兵部省ニ出仕セラレ海軍兵学寮ニ教員三名ヲ要ス、五人ノ中チ採用セントテ永峯、中川、荒川ヲ指命セラル、乙骨先生、一日本所ニ来訪セラレ、早ク俸禄ニ就クハ不可、充分学科ヲ修行ノ後ニセヨ云々、予モ洋行ノ望モアリ、出仕ヲ辞退センカトモ思ヒシガ、家計困難、兄上方母上等ノ事情アリテ先生ノ厚意ニ従ハズ、遂ニ出仕スルコトナル、先輩ノ意見、後屢々実験セシコトアリ。^{（朱書）}「後悔スレドモ及バズ。」

四年九月廿日〔海軍兵学寮出仕申付候事 兵部省〕

同 十月三日〔自今十三等月俸被下候事 同 〕

右ニテ官吏ノ末端ヲ汚ス、矢吹氏ハ陸軍ニ入り工兵大佐ノ時日清戦役ニ鴨緑江架橋ニ成功シ、後男爵ヲ授ラレ、中将ニ進ミ日露役ニハ留守師団長トシテ東京ニ在リ、後病死ス、吉田氏ハ某省ニ出仕シ在官中肺患病死ス、五人同志ノ中チ最健ト思ヒシガ第一番ニ没ス、永峯、中川、予ノ三人ハ兵学寮教員タリ、永峯氏ハ幼年生ノ英語、中川、予二人ハ壮年生ノ数学ヲ担任ス、数学ハ当時算術トイフ、予ハ幾何学代数等ヲ教ユ、当時ノ官階一等ヨリ十五等ニ至ル、―一等乃至三等―勅任、―四等乃至七等

―奏任、―八等乃至十五等―判任、月俸ハ四等250円、五等200円、六等150円、七等100円、八等75円、九等50円、十等40円、十一等35円、十二等30円、十三等25円、十四等20円、十五等15円ナリ、五年ニ至リ兵部省ヲ分チテ陸海ノ二省トセラル、予ハ兵学寮十二等出仕トナル、〔同年五月二十三日 語学伝習申付候事〕是レヨリ先キ四年中米人ガズナ氏ニ英語ヲ学ブ、予等三人外国人ニ直接英語ヲ習ハント一日築地ニ当テドモナク教授スル外人ヲ探リシガヤウヤク此ガズナ氏ヲ探リ当テタリ、某「リーダー」ノ第一冊ナリシガ氏ハ書ヲ開ラキ一行ヲ読ミ聞カセラル発音シテ曰ク……「ケーマウドビスホール」ト僕等眼ヲ見張り出ルトコロヲシラズ、ヨク視シニ……「Come out of his holeナリ、兎カ何カガ……」ノ意ナリシ也、永峯中川氏ト予三人ハ常ニ居ヲ共ニシ最初ニ銀座ノ東六間？堀ニ面スル商人ノ家ノ二階に僑居ス、賄料一切三円ナリ、後築地明石？町ノ漢方医某氏ノ二階ニ住ム、此ニ階住居ノ節盛シニ貸本ヲ読ミ馬琴ノモノハ殆ンド「読ミ」、其他梅曆様ノモノヲモ耽読ス、又乗馬ヲ好ム、借馬屋ハ此ニ階ノ前ニアリ、休日ニハ中川氏ト共ニ遠乗ヲナス―借馬料半日五十銭―、一日午后二人遠乗ヲ試ム、隅田川土堤ニ至ル、先頭ノ中川氏ノ馬不良ニシテ進マズ、予代リテ先頭トナリ緩瀬ヨリ土堤ヲ伝ヒテ千住宿ノ青物市場ニ入り右折シテ尚ホ進マントス、忽然小兒前面ニ現ル、予急ニ急歩ヲ制シテ止ラントス、小兒馬腹ノ下ニ入ル、驚愕シテ下乗ス、其母兄ノ鳴声ニ驅ケ来ル、幸ヒニシテ傷ナキヤウナレドモ母ハ涕泣シテ予ニ迫ル、予ハ頻リニ粗忽ヲ謝シ有名ナル名倉接骨師此町ニ在リ、直チニ之ニ伴ヒ診察ヲ受ク、事ナキヲ知り若干金ヲ置キテ葱茫トシテ帰途ニ就ク、後此事ヲ兄氏ニ談ル、兄曰ク、其様ノ時ハ決シテ^{タツナ}轡ヲ縮ルナ、捨テ、置ケバ馬ハ其ノ知ル以上ハ決シテ人杯ヲ踏マヌモノナリ云々、其後之ニ懲リテカ余リ乗馬セズ。諸語学伝習申付ラレ、兵学寮御雇教師蘭人コーニング氏―海軍大尉ニシテ沢太郎左衛門氏^{（朱書）}在蘭中ノ知人ナリ―ニ就キ英和对訳ノ会話書ナリ、其日

本語ハ羅馬字ニ綴リタルモノ、之レニ対スルハ英語也、氏固ヨリ邦語ヲ知ラズ、英語モ拙シ、人物ハ極メテ率直好々爺ナリ、年齢五十以上ナリ、一日該書ノ和文ヲ高唱シテ曰ク、何ノ木ヤカバノキト、之ニ対スル英語ノ答ヲ求ムル也、予等思ハズ失笑ス、先生ハ不可思議サウノ顔色ヲナシテ予等ヲ熟視ス〔予等之ニ答弁セシカ否ハ忘レシガ何ノ木ヤ樺ノ木ニテヤノ字ハ *and* ニ当テタモノ、ヤハ別ニシテ何ヤ樺ノ木トイフベキニ先生ハ勿論日本語ヲ知ラズ「ヤカバノキ」トイハル〕其無邪氣ニシテ実ニ可愛ラシキ人ナリ、又予等同先生ニ就キテ航海測量ヲ学ブ、又ゼーンスノ航海書ヲ自習シタリ、築地ノ僑居ヲ去リテ英人ヘーヤ氏兄弟ノ宅ニ永峯、中川、予三人ハ塾生トシテ住ミ込ミ英語、文ノ教授ヲ受ク、〔兄ヘーヤ氏ハ兵学校ニ雇ハレタリ、弟ハデビーヘーヤトイヒ支那ニ赴キ病死ストイフ、兄氏ハ遂ニ日本ニ留リ英語ノ教師ヲナシ明治ノ末カ大正ノ初頃小石川白山附近ニテ病死ス、予江田島ヨリ出京ノ後同氏ニ逢ヒ懷旧談ヲ為セシコトアリ、彼ハ高等商業学校ニ教鞭ヲトリ居ラレタリ〕又御雇教師米人ベルキンソン氏ニ英語ヲ、独人某氏ニ就キテ仏語ヲ、清人馮氏ニ北京官話ヲ学ブ（永峯中川予ノ三人）馮氏ヲ某家ニ招聘シタリ、ヘーヤ氏ヲ去リ中川氏ト予二人ハ初メ近藤真琴氏―兵學寮奏任出仕、算術、測量掛―ノ新錢座ナル攻玉塾（当時数学専門ノ塾ハ此攻玉塾ト八丁堀ナル岸俊雄氏ノ塾アルノミ）ニ入ラントセシニ満員謝絶セラル、因ツテ岸氏ノ塾ニ入り高等数学ヲ学ブ、此塾ノ不潔ナルニハ困却セリ、夏時蚤多ク眠レズ乃チ食卓ヲ併ベ其上ニ寝ヌ、塾ヨリ毎日出勤セリ、明治四年頃ハ壮年生徒ニAB号アリ、Aノ中ニハ山本権兵衛、日高壯之丞等ノアバレモノ揃ヒノ権兵衛組アリ、予ヨリモ年上ナル者モアリ、東北戦争ニ出征セシ連中多数アリ、意氣ノ壮ナル驚クベキモノナリ、或冬校員ノ忘年会ヲ江東中村樓ニ開ク、宴酣ナル時権兵衛組「ボート」ニテ此樓ニ押掛ケ来リ予等ノ糞尿ヲ以テ宴会セラル、故ニ之ニ参加スト（学校ノ糞尿代ヲ会費ニ用ヒシトイフ其実ハ知ラズ）辛フジテ退却セシメシト云

フ、予ハ後之ヲ聞キタリ、以上ハ何年ナリシカ確ト記憶セズ
明治五年学校ニ改革アリ、予ハ十一等出仕ノトキ六年十一月兵學少助教、七年四月任海軍少尉、寮直被仰付（学校ニ宿直シ生徒ノ監督ヲナス）六月叙正六位、英国海軍士官以下數十人ヲ招聘シ英国式伝習開始セラル、佐官「ドーグラス」氏―少佐、後大將、ポーツマス軍港ニ司令長官タリシトキ予渡英シテ同君ヲ訪フ、時ハ明治三十八年十二月也、氏大ニ喜ビ其教エ子ガ大功ヲ立テタルコトトテ其満足ヲ表セラレタリ、予ヲ其官舎ニ招キ令嬢ヲシテ予ヲ歓待セラル、同氏ハ公務アリ、予ハ急ギノ旅トテ忽々ニシテ去ル、同氏ノ厚意ニテ「ボート」ヲ以テ予ヲ兵学校所在地「アイル、オヴ、ワイト」ニ送ラシメラル今ニ忘レズ、大尉ジョーンス、大尉ベリー、大機関士サットン、機関士ハーヂング、下士官オースチン氏？オーガストン、ウイローバー等、水兵十数人ナリ、ベリー氏ハ航海士官ニシテ数学ノ中チ幾何學、航海術担当ス、中川氏ト予ハ其通訳兼補助ヲナス、幾何學ハユークリッド式ニテ英文教科書ヲ以テス、皆英語ヲ用フ、生徒モ良ク暗誦ス、卒業生ハ練習艦ニ乘リ込マシメ海外ニ航シ実地練習セシム、或年濠洲ナリシカ米國ナリシカ記憶セザルガ某生徒ガ其地ノ学校參觀ノトキ其國ノ教師ハ東洋未開國ノ人ト視クビリ居リシ事ナラン又當時ハ日本ハドコニアルカモ余リ知ラレザリシ時トテ此生徒ト談偶々幾何學ノコトニ及ビタリ、教師ノ請ヒニ任セユークリッドヲ英語ニテ設題、証共ニ流チヨウニヤツテノケ、大ヒニ驚カシタリトテ婦朝ノ後、予ニ語り、御影ニテ日本ノ面目ヲ施シタリト大笑セシコトアリ、演習問題ヲ科セズ、本題ト補題トノミ繰リ返シ、練習セシム、航海術モ同種ノ問題ヲ繰返シ、練習シ、時間競争ヲ以テ答案ヲ出サシム（平面航法ノ日誌記入題ノ如キモノ）、実地一点張ノ訓練ナリ、現今日本ノ教育ハ余リ理論ニ走り練習ヲ粗カニス、実業科養成ニハ此英国式可ナラン、昔時和算ノ訓練ハヨク此英国式ニ似タリ、（朱書）実用ニ適セシムルニハ然ラザルヲ得ズ」

同七年八月任兵学中助教

初メ予ハ永峯氏等ト共ニ海軍出身志願ニテ出京シ、兵学寮ニ出仕シ、航海術ハ学ビ得タリ、運用科練習ノ為メ実地ニ帆術ニモ登リ作業ヲ習ヒテ粗ボ運用術ノ一般ヲモ覚知セリ、砲術ハ砲術科ノ教官ニ就キテ大体ヲ会得シ、其後チ乗艦シ素志ヲ貫ク覚悟ナリキ（初メ出仕ノトキ赤松先生ノ言ハルルヤウ、イツニテモ武官トナリテ乗艦ハ随意ナリ生徒トナルニモ及バズトイハル）然ルニ永峯氏ハ少尉トナリ練習艦乾行艦？ニ乗組ミ品川沖ニ碇泊ス、此時分ハ海軍士官ノ風習甚ダ乱レ又旧幕人ハ用ヒラレズ、氏ハ憤慨シテ少尉ヲ辞シテ元ノ文官トナル、予等三人ハ学問熱心勤勉家ノ名ヲ得、学校ニ必要ナリトテ愛セラレタリ、是レ自負ニアラズ實際然リシナリ、遂ニ中川氏モ予モ文官トナル、但シ当時ハ武官ヲ見ル輕ク俸給モ同官等ナラバ文官ノ方多シ、予等モ中助教ハ判任ナレドモ中尉以上ニ見居タリ、誤レルノ甚シキモノ共ナリシナリ、後残念ナリシコトモアリシガ断念シ専心武人教育ニ終始セント決心ハセシモノ、元来予ハ武官出身ニシテ中道素志ニ反ス、此事ヲ回顧シテ自己ノ不明ナルヲ愧ヅ、又附記スル一事アリ、一日西周先生ニ伺候ス、先生曰ク卿ハ数学ニ長ズト云フ、造船家トナルベシト、其時ハ海軍士官ノ望ナリシユヘ其意ナキヲ申上グ、後赤松先生曰ク、大尉ニナラレテハ如何ト、其時ハ大尉ト同俸位ノ頃ナリシナラン、答ヘテ申上グ少佐ニハ參レマセンカト、先生曰クソレハ少シ六ヶ敷シト、遂ニ止ム、以上ノ二ヶ条ト兵学寮出仕ノ前、乙骨先生ノ御注意ト合セテ三件ノ中チ何レナリト随從シタラバト後々残念ナリシモ及バズ、少壮時代ヲ誤ル事、先輩ノ意見ノ尊キコト、記ルシテ以テ後ノ戒トナス

同九年八月補九等出仕、算術測量掛申附

同十年一月大小丞以下被廢、此時政府大改革アリ、官名俸級等モ

同十二年四月航海課僚申付、同年十二月海軍兵学校教授補兼務申付候事、但教員五等俸支給候事 海軍省、此年兵学校ニ教授、教授補ヲ置カレ、

教授ヲ奏任、同補ヲ判任トス

同十三年十二月補八等出仕、年末慰勞金二十円下賜

十四年十月編輯課僚兼務申付候事

同十二月職務勉勵候ニ付為慰勞金二十円下賜候事

十五年五月当夏生徒召募掛申付候事

同年七月当夏予科生徒召集掛申付候事

同年九月教授補四等級被下候事

同年十月教官申付候事 但航海術兼数学掛

同十六年四月生徒大試験掛申付候事

同五月入校生徒志願人試験委員兼務申付候事

同九月任海軍五等教官 一等月俸

新タニ一等ヨリ六等ノ教官ヲ置カル奏任トス但シ一等ハ奏任一等ト同ジ

同兵学校勤務被仰付候事

同航海術数学掛被仰付候事

同十一月叙從七位

十七年三月生徒大試験掛兼入校志願人試験掛被仰付候事

十八年四月同

同八月任海軍四等教官 三等月俸

同九月航海表増補元調委員被仰付候事

同十月生徒志願人學術試験委員被仰付候事

同同月叙正七位

同十二月通學士官學術大試験委員被仰付候事

通學士官トハ士官以上ノ學術ヲ高ムル為メニ兵学校内ニ新設セル一科

ニシテ志願者ヲ募ル、後來ノ大学校ノ基礎トナリタルモノナリ、予ハ

静力学教科書ヲ編輯シ且ツ教授セリ、近藤真琴氏ノ彈道論、中川将行

氏ノ動力学、其他数種ノ学術科目アリ

同十九年二月海軍教官被廢

兵学校組織ハ校長、次長等武官タルハ勿論、明治初年ヨリ変遷多く、此当時モ校長次長教務総理等皆武官ナレドモ文官ノ副総理二人ヲ置ク、沢太郎左衛門氏ハ規律主任、近藤真琴氏ハ學術主任ニシテ両氏ハ隠然学校ノ主腦タリ、故ニ一大改革ノ要アリ、次長トシテ伊地知弘一大佐兼任シ目覺シキ改革ヲ断行ス、文弱ノ風ヲ改メ軍紀ヲ張り練兵ヲ奨励シ陸軍の風規ヲ厳守シ、生徒隊ニ驅足ヲ勵行スルコト殊ニ甚シ、疲労倒ルルニ至ル、課長等皆武官ヲ用ユ、文官ハ属官ノミ、普通学科ハ属托教師ヲ用ユ、此改革ニヨリ武官養成タル兵学校ノ面目ヲ一新セリ、次長ヲ目シテ氣違ヒ次長ト呼ブニ至ル、予ハ此人ノ決斷力ニ服ス、予ハ目シテ韓信ト称ス、此改革當時種々滑稽談アレドモ略ス

同日兵学校航海術及普通学教授ヲ囑托ス。教授囑托中報酬トシテ一ヶ月金七十五円贈与ス。今般教授囑托ニ付在校中自今取扱奏任ニ準ズ 海軍省

文官ノ主任沢太郎左衛門、近藤真琴両氏中川将行氏等ハ囑托中ニ洩ル同月夏期生徒大試験委員被仰付。編集員兼務被仰付 兵学校

同三月数学教授書編修委員ヲ命ズ 同

同四月生徒志願人学術試験委員ヲ命ズ 同

同十二月任海軍教授 叙奏任官四等 内閣

二月改革後全ク武官ノミノ組織ナリシガ改革ノ目的モ達セシ故カ復タ海軍教授ヲ新置セラル、奏任トス、但シ教授ノ最高ヲ奏任三等迄（少佐相当）トス、予等大ヒニ不平ナリシガ忍耐セリ

同賜下級俸 海軍兵学校勤務被仰付 海軍省

同二十年四月夏期生徒大試験委員ヲ命ズ 兵学校

同人校志願人学術試験委員ヲ命ズ 同

同二十一年六月兵学校官制發表ニ付追而辭令相渡候迄従前之通り可心得旨達セラル

明治初年機関科生徒ハ兵学校内ニ在リ、英国式伝習ノ後横須賀軍港ニ

移リシガ種々ノ議論モアリシガ兵学校出身將校ヨリ機関官ヲ採用スル制度トナリタリ、故ニ機関学校ハ廃止、同校生徒ヨリ志願者ハ兵学校生徒トナス、但悉皆志願セリ、又兵学校ヲ安芸国江田島ニ移転スルノ議熟シ、新築竣功シ不日移転ノコトナル、江田島移転ハ一問題トナリ、世間頗ル論議アリシガ当局ノ決心堅クシテ動かズ

同七月兵学校普通学教官被仰付。賜中級俸 海軍省

明治四年沼津ヨリ出京兵学寮出仕以来此二十一年マデノ私事ノ大略ヲ記センニ初メ本所緑町ノ兄ノ家ヨリ通勤シ、往復共大概徒歩シ人力車ニ乗リシコト少シ、木挽町ニ僑居ス、次ニハ築地ノ医者某ニ下宿シ、次ニ築地本願寺附近ノ家ニ中川氏ト僑居ス、此トキ呉フク橋内ヨリ出火シ銀座一円築地本願寺、築地ホテル（西洋館ニシテ東京最初ノホテル也）ヲモ延焼セリ、一事本所ノ兄方ニ同居ス、次ニ三人ニテ築地ノヘーヤ氏塾ニ入り八丁堀ノ岸塾ニ入ル、以上ハスデニ記入セリ、兄上家事上ノ都合ニヨリ兄上ハ近藤氏ノ攻玉塾ニ入り測量術ヲ修行セラレ、妻子ハ其舅福島甚左衛門氏ニ下総野木宿ノ実家ニ寄ラレ、母上ハ予ト共ニ芝区烏森町ノ西方愛宕町？古道具屋堀氏ノ二階ニ借室シ常平社ナル弁当屋より箱弁当ヲトリ居リシガ母上ハ何分ニモ不味ニ堪えずトテ自炊ニテ涼炉ヲ以テ煮焼セラルース、遂ニ此家ノ後側ニ借家ス、三室計リノ小家屋ナリ、又烏森神社ノ南裏通某町ノ二階家ヲ借ル、日蔭町ニ近シ、当時相撲盛行シ梅ヶ谷藤太郎―初代ノ―、西ノ海嘉次郎、巨漢武蔵湯等アリ、大達羽左衛門ナル強敵現ハレ梅ヶ谷ニ拮抗ス、天覧相撲アリ、場所ハ芝増上寺境内ニテ官吏ニ陪覽ヲ許サル、当時無敵ノ梅ヶ谷対大達ナリ、大相撲トナリシガ勝負附カス引分トナル、ソレヨリ本場所ニ両関ノ取組アリ、予ハ学校受業終ルヤ否ヤ兩國ニ急行、辛フシテ最下等ノ場所ノ後方、柱ニツカマリナガラ見物ス、ヤガテ梅ヶ谷大達ノ立合トナリ満場ノ景氣物淋キマデ緊縮ス、大達ノ「附ッ張り」ニテ押シ進ム、梅之ニ対シ充分応ゼシガ遂ニ足ヲ割ッテ踏ミ切り、大達ノ勝トナル、是レマデ梅ノ負ケタ

ルコトナシ、予ハ因ヨリ梅畠眞ニテ此時ノ場内ノ光景サマジナンドト云フ計リナシ、其翌日梅ハ京坂地方ニ旅行シ遂ニ廃業ス、横綱ニシテ負ク即チ引退スト、眞ニ其意ヲ得タル者ナリ、現今ノ横綱ニ地附カズノ者アリヤ、該道衰ヘタリト云フベシ、梅ヶ谷ノ後横綱ニテ有名ナリシハ常陸山、栃木山ナドアリ、此相撲流行ノ際トテ素人相撲流行シ予ハ烏森附近日蔭町裏ニテ相撲ヲ試ミ其夜敵ト共倒トナリ胸ヲ痛メ欠勤ス、母上ノ心配セラルルニヨリ遂ニ止ム、木挽町、今ノ歌舞伎座ノ南西采女町ニ一小屋ヲ買ヒ母上ト共ニ移リタリ、又数寄屋橋内有楽町ニ母上ト共ニ移ル、二階建ノ長屋―旧幕府南町奉行役所ノアリシ処、現今ノ邦楽座ノアル処ト同町内ナリ―ノ三軒相隣リテ永峯、中川、予ノ三人住居ス、二階ノ壁ヲ打チ抜キ相通ジテ往来シ会説其他学事ヲ相勵ム、又寄席ヲ好ミ講釈寄席ハ土橋（？見附外）ノ某亭、忘名、銀座尾張町―木村屋パンノ隣リナル―某亭、落語義太夫等ニハ京橋脇ノ金沢―此席ハ大震災前マデ存在セリト思フ―ナリ、講師師ノ伊東燕尾、最モ氣ニ入ル、其歴史物ニ長ジ人物モ武士的ニシテ其議論ニ入ルヤ「天二物ヲ与ヘズ」ヲ標語トシテ説去リ説来ル眞ニ感服セシメタリ、伊達騒動、盛衰記等ノ人物論モ面白シ、桃川如燕ノシンミリシタル談リ物、小金井蘆州ノ水滸伝、田辺南龍ノ軍談、燕尾ノ弟子燕旭堂ノ滑稽モ可笑ク、村井長庵ヲ得意トセリ、落語ニハ伯円ノ名話、円太郎ノラッパ―席上ニラッパヲ持チ来リ、吹ク、円太郎馬車ノ名ヲ残シタリ―、万橋（ヘラ／＼坊）ノヘラ／＼―其ヘラ／＼踊リノ語ニヘラ、ヘツタラ、ヘラヘラ、太鼓ガ鳴ツタラ、ニギヤカダヨ、ホントニソウナラ、スマナイヨ、ヘラヘツタラ、ヘラ／＼―妙ナ手附キテ抱腹絶倒セザルヲ得ズ―、立川談志ノ郭巨ノ釜堀リ―立チ上リテ親孝行郭巨ノ釜堀ノ始終ヲ演ス―、円遊ノステテコ踊リ―尻ヲ端折り脛ヲ手ニテハタキ鼻ヲ撫デナドシテ不思議ノ姿態ヲナス―、桂文治ノ芝居譚、浄瑠璃ニテハ紋左衛門最モ人氣ヲ博ス、不龍軒ナル盲女ノ琴曲ナド今尚ホ記憶ニ存ス、木戸銭五錢位ナリ、豆腐一帖八リン位、湯銭モ八リ

ン位、焼芋一錢二十片、此有楽町時代ニ西南ノ役アリ、竹橋暴動事件アリ、此時、夜中砲声響ク、夢ヲ破ル、何事カ起リシコトヲ知ル、即チ此事件ノ起リシナリ、明治八九年？大塚文倫（文倫ハ海軍大機関士ノトキ英国製造ノ千島艦廻航員トシテ帰朝ノ途沈没ノ際殉死ス）ノ妹孝子ヲ娶ル、長女よしヲ産ム、二年ニシテ病死ス、生来虚弱ニシテ屢々「引キ附ケ」タリ、次ニ妊娠セシガ分娩ニ当リ、シカントイフ病ニテ死胎分娩尋テ母モ死ス、時ニ明治十四年一月三日也、孝子ノ実父大塚氏ハ旧幕人ニシテ箱館ニ在勤ス、孝ハ後妻ノ子、其先妻ノ女某ハ武田斐三郎（成章初名）ノ妻、同氏ハ伊予大洲城主加藤氏ノ臣、脱藩シ文武ニ秀デ幕府ニ仕フ、箱館五陵郭ヲ築キ、又汽船ニ乗リ組ミ之ヲ指揮操縦シテ測量ヲナシ黒龍江ヲ遡ルニ至ル、明治政府ニ仕ヘ陸軍大佐、士官学校学科提理ニテ没ス、予ト姻戚トナリ屢々訪問セリ、酒豪ニシテ其死没ノ因ヲ為シタリ、其子英一ハ仏語ヲ以テ陸軍教授タリ、今ハ退官（昭和二年）、妻ノ死去ノ為メ一時家ヲタタミ本所ノ兄上方ニ母諸共ニ偶居ス、同十四年十二月廿七日阿部久次郎ノ長女ヤヘヲ娶ル（ヤヘノ祖母ハ福島長左衛門妻ノ姉妹、兄ノ妻シツ子ハ福島ノ女ナリ）、同十五年一月京橋区元数寄町ノ三等煉瓦家屋ニ移ル、前記呉服橋内ヨリノ大火ノ後、政府英断ヲ以テ京橋新橋間西ハ御堀、東ハ三十間堀ヲ界トシテ赤煉瓦二階建ノ洋館ヲ造リ、銀座等表通りヲ一等、横表通りヲ二等、裏通りヲ三等トシ、年賦金ヲ以テ上納セシメ何年後ハ私有タラシムルノ則ヲ發布セラレ、人民ノ望ニ任ス、永峯氏ハ妻帯シ居シユヘカ二等屋ニ入ランカト相談セラレタリ、同氏ノ先兄今ニ至リテ感服シタリ、予ガ此三等家屋ハ間口二間奥行三間余ノ洋館、洋館ノ二階ハ八畳、三畳、其下ハ板ノ間、六畳、三畳、此煉瓦屋ノ次ニ和室四畳半、次ハ台所、裏ニ二階建アリ、上、下各四畳半ナリ、八重ノ友人荻野吟子ハ同居シ裏ノ二階ヲ居室トス、同女ハ妻八重ト松本万年ノ娘荻江氏ノ漢学塾ニアリテ共ニ医術修業セル縁故ニ因ル、吟子ハ開業医ノ受験及第ノ後、女医ノ開祖タリ、下谷黒門町辺ニ開業、後

志方之善ノ妻トナリ北海道ニ移住シ耶蘇教伝道、開拓ノ業ヲナシ医業ヲ兼ヌ、夫氏死シ、出京、隅田村ニ開業セシガ大正二三年頃病死ス、惜ムベシ、不遇ニシテ世ニ知ラズ、亡妻ノ弟志村次郎同居ス、松坂源氏ノ小学校ニ通学ス、枋内曾次郎ハ佐藤昌介氏ノ親戚ナリ、兵学校志願生ニシテ予家に来リ攻玉塾ニ通学ス、予学事ヲ視ル、現今海軍大将、妻繁ハ八重ノ妹ナリ、二階ハ各天井低ク、頭上僅ナリ、其家賃七円也、銀座通元多美寿屋呉服店跡日報社―日々新聞社―、現今某社ハ東南数間ニ在リ、数寄屋橋通り北側（現今ハ南側）ノ天金―天プラ屋―ハ四五十間近クニアリ、家ノ前ノ小路ヨリハ銀座大通リニ出ヅ、便利至極ノ住宅ナリ、湯屋ハ隣ニアリ、理髪店ハ筋向ニアリ、金春ノ芸妓ハ鍊瓦ニ住シ、一河ヲ隔テ、烏森神社附近ニ挾斜ノ街アリ、現今的ノ湯泉モ土橋附近ニ新設ス、朝野新聞社ハ尾張町―現今電車交又点―西北角ニアリ、料理店アリ、菓子舗広瀬アリ、旅館アリ、病院アリ、洋品店アリ、此鍊瓦屋一体ハ近代の文明ヲ代表セルモノトス、予ハ芝居ヲモ好ム、屢々新富町ノ新富座ニ看劇ス、当時活劇ノ開祖九代目市川團十郎、世話物ノ名優五代目尾上菊五郎、女形名優岩井半四郎、老優中村鶴藏、踊リノ名人中村芝翫―後歌右衛門、今ノ歌右衛門ノ父―、活達ノ市川左團次等アリ、二流ニハ尾上松助―現今ノ名優―、染五郎―現今ノ幸四郎―等アリ、殊ニ団、菊ノ芝居ニハ毎回殆ンド欠カサズ、一時ハ連中ニ入レリ、今モ尚ホ記憶ニ存スルハ、河内山ノ団、直侍ノ菊、三千歳ノ半、菅原天神記ニハ毎日役ヲ取替ヘタリ、団ノヨダレクリノ如キハアツト言ハセタリ、一日団ノ松王ニ菊ノ彈藏、左団次ノ源藏ニ何ノ何ト云フ、予モ二回見物セリ、団ノ為朝、菊ノ死神、等枚拳ニ違マナキホドナリ、大坂ヨリ宗十郎来京、是亦名人、工藤ニ扮スル如キ上品ノ人物ナリシ、当時劇場モ少ク、本所ニ寿座、芝ニ森元座―団十郎ノ河原崎權之助時代ニアリシ座―、両国附近久松町ニ久松座等アリ、余ハ所謂ル緞帳芝居ハ芝溜池ノ葵座、下谷三味堀近クノ柳盛座、浅草寺奥山ノ裏ノ宮戸座、アリシ、余ハ知ラズ、新富座看劇料

ハ一人前ベカス（弁当、菓子、酢）ニテ二円以内ト覚ユ、当時ハ出方茶屋ニ心附アリ、案内出費多シ、写真師ハ浅草奥山ノ北亭筑波氏―最モ早シ―、内幸町近ク丸木利陽氏、九段坂ノ某氏、小川一真氏等アリ、牛肉店―前ニモ記シタルガ―、最モ早キハ芝露月町ノ中川―当時ハ其汁ハ味噌ヲ入レタルモノ―、浅草厨橋附近ニ一軒、三河町ノ某、等三四軒アリシノミ、一人前五銭？後木挽町現今ノ歌舞伎座ノ前ニ一店アリ、肉モヨシ、一人前拾銭トナル、又ズト後ニ浅草寺内常盤店出来タリ、大分高価トナリ何十銭ナリシカ忘レタリ。人力車製造ハ銀座ノ秋葉大助アリ、鍊輪ニテ最初ノ頃ハ腰掛台高クシテ乗リ心悪ク一人乗リ二人乗リノ二種トス、其後部ノ板面ニハ絵模様ヲ附ス、錦絵的、歴史的ノ種々雑多ノモノナリ、自家用即チ手車ニハ黒塗りニ定□一箇ヲ金色ニス、車夫モ黒ノ法衣ヲ着ス、現今ノ如シ、幌ヲ附スルニ至ル―初メ幌ナキモノアリシヤウニ覚ユ―。風俗ハ明治四年佩刀廃止令出ヅ、急ニ腰輕ク感じ不快ヲ覚エタリ、服装制限ナク、男子ハ袴ヲ着クルモノ少ク、学生モ然リ、兵児帶流行シ、着流シ兵児帶姿履物ハ下駄、駒下駄―畳附キノモノ、高キ木履（ボツクリト云フ）流行ス―、髪ハ短髪少シ、予モ羽織ハ有スレドモ袴ハ持タズ、洋服ノイカガハシキ古物ニテ間ニ合ハセ居タリ、官省ニ出動スルモノ和服ナラバ袴ハ着用シタリ、初メテ兵学寮ニ出仕セルトキ洋服出来セザル間ハ羽織袴ニテ出校シタリ、山下町ノ古着洋服店野田屋ニテ初メテ古着ヲ買ヒ着用セリ、此野田屋ノ後ハ大災火前マデハ銀座通りニ在リ、今イカガセシカ、新聞紙ハ五年ニ東京日日新聞、郵便報知、六年朝野新聞、七年読売新聞等発刊、其後之レニ続ク。福沢諭吉先生の著かたわ娘にて婦人の眉毛、お齒ぐろを嘲弄的に諷刺し「学問のすゝめ」「西洋事情」等ノ名著にて大ひに文明開化を鼓吹し西洋崇拜熱を煽られたり、角を矯めて牛を殺すの憾なきにしも非ず、又先生ハ演説ノ必要ヲ唱導セラレ三田慶應義塾内ニ練習開始、夫レヨリ言論界ヲ興起ス、在野ノ平党連ノ中ニハ必須ノ武器タリ、各所ニ演舌会流行ス、沼間守一氏等ノ鶯鳴

社最モ盛大ナリ、両国ノ井生村樓ハ演説会場ノ重ナルモノナリシ、予モ其社員トナリ討論会ニ出席シタリ、島田三郎、田口卯吉、角田眞平等——島田、田口ハ同窓ノ友人——ト屢々相会ス、討論席ハ議長ノ左右両側ニ賛成、反対ト相對セシメ、賛成側ニアリテ練習シ次ニ反対側ニ転席スルハ自由也、以テ弁論ヲ練ラシムルノ工夫ナリ、或時予ハ某問題ニテ功利説ノコトヲ論ゼシトキ原語ヲ用ヒ「ユーチリタリアニズム」云々ト頻リニ言ヒタリ、終リタル後ニテ中川、永峯二君ノ中チ一人、予ニ忠告シテ曰ク、君ノ原語ノ「ユーチリタ……」マデハ良カツタガ「——タニアリズム」ト聞エタカラ注意セヨト、又京橋区竹川町辺ノ裏通り松坂源氏ノ私立小学校（其長男茂氏ハ江田島兵学校ノ生徒トナリ大佐ニテ退官ス）ヲ借用シ屢々演説会ヲ催シ無料入場セシム、海軍中尉？堀龍太氏ノ達能、弁舌（氏ハ駿州三保羽衣神社？ノ社人、勤王家、賞曲祿若干ヲ賜ハリシガ返上セシトカノ一奇人也）、荒川高俊（駿河ノ人、弁舌モ良ク剛直ノ人、一時有名ノ士ナリ）等モ此会ニ来リタリ、又神保町某樓ノ演説会ノ時大石正巳氏ノ演題ニ「廢帝論」ヲ出ス、予等大ヒニ反駁ス、討論会流行ニテ討論問題集ナル英書ヲ購入シ、問題ノ撰撰ヲナシタル程ナリ、予、出題者トナリシ時「皇太子ヲ北地王ニナシ奉ルノ可否」ヲ呈出シタルヲ記憶ス、討論賑ハシカリキ「九年五月ニ朝鮮国修侯使来リ兵学校ニモ參觀ニ来ル、使者某ハ輿ニ乗ル、兵学校海岸ニ据エタル重砲ヨリ演習発砲セシニ其響キ大ナル為メ其随員ノ中驚キテ逃避セントシ又耳ヲ掩フ乃チ綿ヲ詰メシメタリ」^{（備考）}「（九年ノコトアリ）有楽町時代ニ入ルベシ」、十三年集会条例發布トナリ官吏教員等ノ公開演説等禁示トナリ、討論会ニ出ゾルコトヲ得ズ、和歌ハ近藤眞琴氏ノ奨励モアリテ橘道守大人ノ門ニ入り教ヲ受ケ、近藤氏主催ノ会員トナリ歌合セ競歌ニ詠進セリ——橘大人モ兵学校ニ出仕、其批評ヲ仰ギタリ——、又別ニ永峯、中川、真野肇——昭和ノ貴族院議員、元九州大学総長文二ノ父上、兵学校教員ナリ——、同文二、永井當昌等ト別ニ歌合ヲ催シ、速吟会（時ヲ限り十首ナドノ如キ）ヲモナシタ

リ、詩文会ヲ開キ鉛槧会ヲ造ル、広島ノ人山田養吉先生——當時兵学校幼年生徒ノ教授——ヲ会頭トシテ批評添削ヲ乞フ、先生退隱——広島ニ——ノ後ハ彦根ノ人渋谷啓三先生ノ教ヲ受ク、又四谷垣之先生ニ乞ヒ漢文講義ヲ受ク、相長会ト称ス、詩文題ヲ課ス、廿一年江田島在勤前ニ廢止ス、麹町山王社地内星ヶ岡茶寮ヲ会場トシ、会員ニハ平山成信、村岡良弼、合川正藏、永峯秀樹、中川将行、予等五六人、会終リテ晚餐ヲ共ニシ、京都風食席料理ノ塩梅モヨク、浅酌微醺、清会ナリキ、此頃ノ山王社ハ殊ニ幽邃ノ域ニテ山下ハ溜池ノ風致未ダ失セズ、此ノ如キ会合ニハ好適ノ地トス、長女豊の生誕ハ十六年二月七日ニテ此日稀有ノ大雪ニテ予ハ程近キ兵学校ニ出勤セルニ往來困難、人力車通ゼズ遠路出校不可能ノ人モアリシ位、之レニ因ミテ兎ノ名ヲ豊トス——雪ハ豊年ノ貢——、十七年二築地一丁目十八番——輕子橋通りノ西、文海小学校ノ南東方、向側ナリ——ニ借家ス、——當時商船学校長中村六三郎氏ノ家、後、之ヲ買フ、三百円余ニ階七、玄關二、玄關脇五、客室六、茶間六、離室三、下女部屋三、台所（内ニ雜水用井戸）、物置アリ、小庭園アリ、地坪五十五、地代坪五錢——、荻野氏引キ繼ギ同居ス、十八年二月十三日次女信生^{（フナ）}ル、荻野氏下谷ニ開業医ノ開祖トナル、母上同居セラレ離室ヲ居室トス、隣家ニ島田隨時氏アリ——沼津兵学校ノ同窓ノ友、工部省ヨリ通信省ノ出仕？永峯氏ト予ノ三人、囲棋ニ熱中シ毎日曜ニ島田氏ニ会シ終日入夜烏^{（カ）}ノ勝負ニ耽ル。當時清楽器中月琴流行ニテ至ル所ニ「ハウ、イ、コ、メー、リー、フアー……」ノ声ト楽音聞ユ、予モ其譜ニヨリテ独リ稽古ヲナシ、少シ弾ケタリ、其後全ク廢レタリ、今ハ影タニモナシ、中村樓ニ清樂大会アリ、參聴セリ、楽器ノ数、スコブル多ク、提琴、月琴、木琴、蛇尾線、笛、太鼓、銅鑼、等枚挙スル能ハズ、中々面白カリシ——、栃木ヨリ義妹繁屢々来泊シ家事手伝ヲナス、学生二人ノ学事一切ヲ頼マル、大久保利通公ノ妾勇子——京都料理店「力^{（イナ）}ノ娘トイフ、果シテ然ルヤ否ヲ知ラズ、美ニシテ賢、公ヲ艱難中ニ助ケシトカ聞ク、此人ノ子ニ達熊何熊等アリ、此達

熊氏後利夫ト改ム、海軍少尉ノ時病死ス—ノ子達熊、川路利路—有名ナル大警視—ノ姪平田恒彦—母シマ子ハ川路ノ妹—ナリ、達熊ハ兵学校ニ入り、恒彦ハ英国ニ留学ス—造船所ノ職工トナリ、数年後海軍造兵大技士ノ時横須賀造兵廠出仕タリ、富士艦大砲射撃ノトキ旋廻ノ工合宜シカズ之ヲ理メントテ砲身ニ夾マレ惨死ス—、此人剛直真ニ愛スベキ好人物ナリシ、達熊氏ハ冷静慎然ノ質、長身、瘦軀ナリ—母氏云フ、故利通ノ風アリシト—、此二人何レモ壮年死没ス、惜シキ事限リナシ、復タ志村次郎ノ学業養成ノ委願ヲ受ケ同居セシム—学事思シカラズ、後兄文倫溺死ノ後苦学水産講習所ヲ卒業セリ—、現今不遇—大島在勤中良妻死、男一人女三人アリ、鰥夫、他人ノ家ニ僑居ス—、明治四年以来旅行ノ事、以下ノ年代、月、等前後セルモノ多カラン、十九年後ハ日記ニアレバ正確ナリ、ソレニ附ケテモ惜キコトハ維新前後ノ多事ノ時代ニ若シ日記セシナラバト遺憾至極ナリ、兎等ニモ日記ノ必要ヲ説ケドモ実行セズ、後悔スルコトアラン、—江田島移転迄数年間—ヲ記サンニ、平岡道生—沼津出身ノ後輩、海軍機関学校ノ教官—氏ト兩人、霊岸島ヨリ汽船ニテ土曜ノ午后千葉町ニ上陸、同町ヲ過キ佐倉街道ニ出デ夜ニ入り大ヒニ苦シム、暗黒咫尺ヲ弁ゼズ、相呼応シテ進ム、進マレズ、予ハ遂ニ竹藪ノ中ニ迷ヒ入ル、兩人相携ヘテ路ニ佇立ス、人來ル提灯ノ光リニ安心シ、一軒ノ家ニテ提灯ヲ借り酒々井駅ニ入りテ一泊シ翌日ハ佐倉ヲ見物シ習野原ヲ通過シテ帰宅ス、—明治十年後ナラン—、又或時古河町ノ叔父渡辺織江殿ヲ訪ヒ頼政大明神ノ神体ヲ拝見ス、高キ石碑ナリ、其上ヲ蓋フニ龕ヲ以テシ、之ヲ殿内ニ納メタルモノナリ、殿前ノ側ニ猪ノ早太ノ墳墓アリ、伝ニ曰ク、早太主ノ首ヲ携ヘ來リテ此処ニ埋葬セシト。治右衛門老人許ヲ訪ヅレ明治元年一時潜伏ノ恩ヲ謝ス、老人存生セシカ否ヲ記臆セズ。又或時野渡村—古河在—ニ川島忠四郎氏—其母アサ子ハ福島長左衛門氏ノ娘、即チ予嫂静子ノ姉ナリ—方ヲ訪ヒ其野渡川岸ヨリ舟ニテ投網ニ誘レラレ、予モ試ミシガ手易キモノニアラズ、網ト共ニ落入リタ

リ。或時古河町城内ノ河口寛氏ヲ訪フ、—氏ノ妻藤子ハ予嫂静子ノ姉、氏ハ漢籍ニ長ジ西洋医ニシテ勤王家ナリシナラン、明治初年官吏トナル、賞典禄ヲ賜ハリシトカ云フ、其著海外詠史百絶ヲ予ニ贈ラル、珍書ナリ、藏書中ノ尤ナル者也—、氏ハ鯨骨漢、不為世所容、辞官、隱棲、無子、弟久齋?継家、業医、在古河町、—昭和ノ方今ハ其消息如何ヲシラズ—、古河地方ニ行クニハ本所堅川ヨリ小蒸汽船ニテ江戸川ニ入り関宿ヲ經、思川ニ入野渡川岸ニ上陸スレバ川島氏宅ナリ、本所ヲ正午過?出航シ途中夜ニ入り明日着スル也、減水ノ時ハ浅瀬ニ膠シ一時客ヲ下ロシテ重ヲ減ジテ進航セシムル時アリ、予モ此難ニ遭遇シ浅瀬ニ入り船ヲ押セシコトアリ、又福島長左衛門氏ヲ訪ヒ同氏ト共ニ栃木町阿部久次郎氏ニ至リ許婚ヤヘトノ結納書ヲ進呈シ一家ニ面会セシコトアリ、往ニハ野渡川岸ヨリ思川ヲ遡リ新波河岸ニ上陸シ大橋久三郎—ヤヘ子ノ叔母千代子ノ夫、後離縁シテ千代子ハ阿部ニ戻リ其子弥三家ヲ繼グ—ヲ訪ヒ徒歩シテ栃木町ニ至リシナリ、明治十五年ヤヘヲ娶リシ後屢栃木町ニ至ル、大平山、岩舟山、出流山、柏倉金比羅山、唐沢山等ニ至ル、大平山ハ有名ナル者水戸浪士ノ籠リシ処、神社壯嚴眺望佳、岩舟山ニハ河原ニ臨ミテ船ニ乗り居ル地蔵尊アリ、絶崖上危キ境、本堂ハ数多ノ羅漢安置ス、其中ニハ亡父母ニ似タル者有リト云フ、出流山ハ大平ノ山続キニテ岩屋觀音アリ、大ナル鍾乳洞甲乙二窟アリ、甲者奥深ク種々ノ形シタル者二種々ノ名ヲ附シテ尊敬セシム、狭キ所ハ体ヲ斜ニスベク或ハ匍匐スベク又ハ闊歩スベク頗ル大ナルモノナリ、奥ノ方ニ鍾乳ノ形ガ恰モ衣裳シタル人体ニ似タル者アリ、之ヲ觀音像トイフ、頭部ハ判然セズ裳ヲ引キテ優美ナリ、窟孔アリ風寒ニ寒冷ナリ、案内者云フ此穴極リナシ、西方浄土ニ通ズト云々、柏倉ハ琴平山ト号シ大平ト出流ノ間ニアリ山上天狗ノ羽扇ノ大ナル者—「ブリキ」カノ材ヲ用フ—直立、遠方ヨリ望ムベシ、山上ニハ祠建チ旅舎飲食店等アリ、一時流行セシガ方今廢レタル有様ナリ、唐沢山ハ田原藤太秀郷ノ居城址、山高カラズ山上、大井戸アリ、大炊ノ

井ト云フ、鏡岩―物像ヲ鑑ムベシ―、石垣ノ残片アリ、予ノ登リシトキハ以上ノ外何物モナシ、三方山繞リ形勝ノ地ナリ。後二佐野常民伯ハ其後裔ナリトテ宮殿建立、面目ヲ改メタリト云フ、年代ヲ忘レシガ或年山本淑儀、永峯、中川三君ト予ノ四人神田橋外ノ「ガタ馬車」ヲ傭ヒ八王子ニ至リ、高雄山ニ登ル、山甚ダ高カラズ樹林茂リ幽閑靜寂ノ境界ナリ、毎町ニ石標立ツ、一町ハ四十間―予ハ歩數百五十歩一町ナリ、之ヲ以テ里程ヲ計リ殆ンド誤ラズ―ナリ、谷間ニ瀧アリ、其処ニ顛狂者治療所アリ、山頂ノ寺院ノ前ニ深き井戸アリ、帰途ハ徒歩、多摩川南岸ニ出デ平山武者所ノ旧里トカラ過ギ藻草ノ正蓮寺―有名ノ庭園ナリシ―ヲ觀、深夜帰京ス、流石ノ健脚家ノ誇モ新宿辺ニテ大ヒニヘコタル、東京近郊ノ王子、市川、鴻ノ台、芝又帝釈、亀井戸、蒲田梅林等ニハ永峯中川氏と屢々散歩セリ、最モ鴻ノ台ヲ好ム、明治十六年七月二十一日中川將行、同弟源吉氏と日光ヨリ諸所に旅行ス、兩國橋傍より汽船ニ乗リ翌朝四時古河ニ着ス―船賃一人分一円二錢―、徒歩酷暑夜ニ入り宇都宮ニ至ル、此日ノ暑氣酷甚、日光方面ヨリ來ル旅人等ハ扇扱ヒモセズ、暢氣ナリ。予等ハ汗「ミドロ」ニナリ、數歩シテハ並木ノ松影ニ憩フ、其筈ナリ、南風ナリ彼等ハ向ヒ予等ハ背ニス、宇都宮ニ入リシ頃ハ疲勞其極ニ達シタリ、手塚屋ニ泊ル、直ニ入浴シ餐シ按摩ニ揉セ乍ラ熟睡ス、翌日モ亦酷暑、徳次郎宿ヨリ人力車ニテ大沢マデ―十六錢六リン―、大沢ヨリ馬車ニテ鉢石ニ至ル―賃二十五セシ―、小西喜一郎方ニ泊ス―茶代一円(三人分)―、二十四日ニ徒歩、三社ニ參詣―三人分ノ費用四、五ヲ記ルス、九錢 三仙堂。一錢五リン□□。六錢茶屋代?、二十錢 案内料、四錢 茶代―、午后霧降瀧ニ向フ、宿ノ番頭云フ案内ヲ附ケマセウ、予等曰ク「入リマセン」ト、勢ヨク出掛ケ、徒歩數丁、平易ナリ、一ノ岐道ニ出ツ、右ハ畑ナダアリ左ハ山林、予等左ニ入ル、道ニ迷ハンヲ恐レ、行ク／＼樹枝ニ紙片ヲ結ビツ、大分進入ス、水声聞エ初ム、多分霧沢ナランナド話シナガラ行ク、忽チ声アリ、「オメー等ハトゴニ行ク」ト、驚

イテ見上グレバ遙カノ山腹ニ一里人アリ、予等曰ク「キリフリ」ニ行ク、彼曰ク「コ、ヲ行クト山奥ノ木コリ途ダ、後へ戻リ、分レ道ヨリ下ノ方へ行ケヨト、予等厚ク謝シ紙片ニヨリテ先ノ岐点ニ戻リ、田圃ニ出テ辛フジテ瀧ノ上ニ出ツ、下リテ瀧ニ身ヲ浸タシ、中川氏ハ焼酎、三錢、予ハ鶏卵二個、四錢、ウバ玉、三錢、ヲ食フ、此行失策四度ノ中ノ第一ハ是レナリ、夕刻帰舍ス、番頭ニ質問セラレ失策ヲ語リシニ彼曰ク、アナタ方ニ案内人ヲ無理ニ勸ムル様ニナルユヘ控ヘテ居タガ実ハ先日一書生サンガ夜ニ入りテ帰ラズ、大騒キトナリ人ヲ出シテ搜索セシメシ二道ニ迷ヒ猛獸等ヲ恐レテ樹木ノ上ニ夜ヲ明カシタリ云々ト、旅ニテハ生意氣ノ事ハセヌモノナリ、二十五日ハ七時出立、願滿湖、大日堂、脇道ニ入り裏見瀧、馬返村ニテ昼食、十錢、大谷川ヲ徒涉シ劍ヶ峯、中ノ茶屋、華嚴瀧ハ雄大、―茶代ハイヅレモ三人ニテ二錢又ハ三錢―、中禪寺、其湖畔ノ茶店ニ休ミ湖水ニ入り泳ク、水碧、底清ク深ク所謂ル底氣味悪ク、忽々ニシテ止ム、菖蒲原ノ菖蒲花麗ク山上ノ原野風景絶勝ナリ、之ヲ往、六時湯元ノ松本平左エ門ニ投宿ス、湖水温シ魚遊ブ、―三人分茶代三十錢、宿泊料八十四錢、予ハ按摩ヲトル、八錢ナリ―、二十六日八時立チ、湯瀧又ハ龍頭瀧ヲ見、清瀧觀音ニ詣シ再ビ小西ニ宿ス、二十七日―此日亦徒歩―六時半出立、板橋ヲ經テ鹿沼ニ向フ、途中見野村二万里小路藤房卿ノ墓アリ、鹿沼ノ木村利右エ門ニ投宿ス、茶代十錢、二十八日鹿沼ヲ出テ大足川渡船、南磨川ヲスギ小倉川渡船、栗野宿、粕尾ヨリ左折、大越路峠ヲ越エ長野、永?、ノ下本ヨリ寺坂峠ヲ越エテ出流山ニ再度ノ參詣―里諺ニ往クモバカ往カヌモ馬鹿ト、但シ適評ナラン、予ハ二度「バカ」ナリ―、山屋半兵衛ニ宿ス―宿料二十三錢、茶代十錢―、山屋ノ鴨居に左ノ揭示アリ

定

金、銀、銅錢 御布告之通

我等勢田江の義未だ唐崎にて三井の鐘も無之候間たとひ石山片田ノ御

方様たりともかし売之儀比羅に御断り申候矢橋現金御座候へば粟津とも直ちに奉差上候也

月日

二十九日徒歩ハ子ヅル羽根鶴峠ヲ越ユ、峠ニ木彫ノ地藏尊アリ―伊予ニ一ツ此処ニ一ツ日本ニ二体ト云フ―、葛生町、安蘇川橋、多田、栃木ヨリ安蘇川ヲ渡リ唐沢山ニ登ル、又栃本村ニ下リ琴平山ニ上リ―唐沢山、琴平山ノコト前ニ出ヅ―、十一屋ニ宿ス、明治十四年独行登山ノ時ニ建築中ナリシ絵馬堂竣功セリ、山上ヨリ右ニ大平山、赤間沼、中央栃木、筑波山、左ニ皆川ノ古城址、螺山アリ、三十日下山、小野寺村ヲ経小野小町墓―埋髪トイフ―、岩舟山ニ上ル、百番地藏尊―前ニ記事アリ―アリ、佐野ヲ過キ足利町ノ足利学校ヲ参観ス、此日炎熱甚シク疲労モ甚ク田圃道ノ小流レニ足ヲ浸スコト数分、辛フシテ疲ヲ減ジタリシガ労足ヲ癒ス一法ナリ、大成殿―間口八間、奥行五間―、内ニ孔聖ノ像アリ、右ニ宗聖曾子神位、垂聖孟子神位、左ニ復聖顔子、述聖子思子、又其左ニ小野篁アリ、三十一日徒歩、渡瀬川、太田町、妻沼橋、同舟渡、矢蘇舟渡、熊谷、此レヨリ汽車、后四時三十三分、至上野、六時?、十日間ノ旅費九円七十五銭六三ナリ、酒ハ吞マズ、遊興ハセズ徒歩旅行ナレドモ一日一円足ラズナリ、途中ノ雑費トシテ各自五十銭ヲ出シテ三人順番ニテ一日ノ幹事トナリ中食等ノ雑費一切ハ総ベテ幹事ノ意ニ任カシ一切他ハ嘴ヲ容ルルヲ許サズ、休憩モ当番ノ随意ナレバ他二人ガ休ミ度クモ休マレズ、飲ミ度ケレドモ飲マレズナド、中々滑稽ナリシ、此道中ニテ中川兄弟、道順ノ損得ニ議論ヲ生ジ、弟ハ其主張ヲ枉ゲズ自ラ信ズル他ノ道ヲトリテ復タ会合セシコトアリ、兄弟ノコトトテ笑ツテシマツタリ、三人旅ハ兎角良カラヌモノトイフ、此後コレニ類似ノコトアリ、同年八月五日乃至十四日、真野肇氏ト熱海温泉行ヲナス、真野氏ハ年長且ツ徒歩家ニアラズ、新橋ヨリ神奈川迄汽車―二人分五十銭―、白戸村休ミ、二銭、白戸村ヨリ人力車―二人分三十銭、休二銭―藤沢マデ、昼食―二

人分三十銭、茶代十銭―、初メ团扇ノ粗末ナル者ヲ寄贈、茶代ヲ投ゼシヤ否此家ノ娘上等ノ者ト引換フ、予曰ク已ニ有リ、娘曰ク請フ先者ト換ヘヨト、但シ茶代ナキモ粗扇ハ出スモノナラン、馬入川渡船―賃二人分四銭六―、藤沢乃至小田原人力車代―二人ニテ一円二十銭―、途中三度休ム―二人分五銭、二銭、一銭四―、酒匂川渡―二人分五銭―、予ノ車夫奇弁、行々談話、解人頤、彼曰小僕、戊辰之際奔走東西、転戦奥羽之野、小僕夥人之痴鈍者皆為彈丸所斃者多、語氣豪壯、云々云々、予曰、汝當時為一隊長乎又一兵卒乎、彼曰否只人足而已、彼顧視而大笑、既而彼謂予曰、挽賃一円十銭、小僕奮勵精挽、休憩二回耳、南郷、梅沢也、此間普通六回停休之習慣、然而如右二回、請大爺増加十銭、予不応、彼自後方説真野君君亦不応、暫而同君回顧予、默額點頭、其意如有許其請者、予亦応以目与額、遂相謂曰、諾矣、行五六町、四五輛人車乗客来過、予等車夫、謂彼等曰、卿等相換乎否、彼等亦不応、二人大呼曰僕等二客行熱海、僕等既与客予約、予叱曰、勿譌、予明日徒歩、汝等既所知也、友人乗車未決耳是亦汝所知也、彼等曰此事固不関大爺之事、忽劳意、乘与不乘、大爺所扱也、予曰汝等騙彼等予等非所関、已而乘互換車、行三里許過梅沢、休憩唐沢海辺、車夫曰、明日、大爺請乗僕車、予曰、予不乗、他或乗、曰与先車夫約束、請諒、曰先車夫騙汝等、予非所関、彼等曰、然哉、曰、先車夫惡漢騙僕等、可惡々々、請訂新約、予曰予決徒歩、彼等遂無語、六時三十分着小田原、投宿中松旅舎、予謂真野君曰車夫如何、曰決乗車、曰価、曰一円、予曰令息文二君所乗車賃七十銭云、曰雖然、途中煩多、故決耳、以上日記ニアル文ヲ其假記ルス、当時予漢作文修行中ナリシユヘ試ミニ記ルシタルノミ、宿料、二人分七十二銭、茶代、二人分二十銭、前回ノ徒歩旅行トハ大分趣キヲ異ニス、六日四時三十五分発小田原、真野氏ハ人力車、予ハ徒歩、江ノ浦、吉浜休ミ熱海真誠舎ニ投宿、―三島駅本陣世古六太夫ヲ主人トス―、茶代二人分二円、入浴二回、吉田直温君夫妻ニ樋口屋ニ逢フ、七日晴吉田氏滞在既二周二シテ

倦因ストイヒテ本日箱根ノ木賀ニ去ル、真野君ト木宮社ニ詣ゾ、一入浴
 三回、蒸腦一回、居室ヲ前回第一ノ三階樓ニ移ス、眺望佳ナリ、「立
 出て沖路遙に眺ムレハ大島山ニ烟立ツナリ」七時独行伊豆山権現社ニ詣
 ツ、石階數十登尽ス処ニ華衣ニ、殿宇古色ヲ帶ブ、高野堂ノ左方ニ躑躅
 アリ、丈ケ九尺、奥院亦頗ル古色蒼然、石灯籠ノ銘ニ貞享三年―徳川綱
 吉ノ時―トアリ、帰舎直チニ魚見―魚類ノ有無ヲ報ズルノ台地ナリ―ニ
 至リ、又真野氏ト興福寺ニ至ル、九日曾根静夫、加藤藤次郎、勝山某、
 小山文三郎―此地ニテ知友トナル―氏ト日金山ニ登ル、二十丁ニテ地藏
 堂ニ至リ次ニ頂上ニ達ス、十国峠モ曇天ノ為メ僅ニ駿、相、豆ノ三国ヲ
 見ルノミ、石標ノ銘ニ天明三年―ト刻ス、幽蹊登尽日金岳、吹送涼
 風夏尚寒、五島七邦雲霧裏看相豆駿州巒、十日独歩網代ニ至ル風光
 佳絶、三面帶山、一面枕海、戸數四百許、乾海賊二十枚、十九錢、同眼
 球―メンボ―ト称ス―ヲ買フ、帰途行半里許、暑甚シ、一農家ニ入り水
 ヲ請ヒ携帶ノ昼食ヲナス、上多賀村トイフ、二錢余ヲ主人ニ呈ス、主人
 固辞シテ曰ク、勿顧慮敢辞々々予曰甚タ礼ヲ失ス、然則該呈令娘、
 二十二三歳、汲水二回、可憐也、暑熱酷烈、坂路極困、前月ノ日光行ノ
 古河宇都宮間ノ苦艱ニ重ク、途中吟アリ、「見渡セハ心ニカ、ル浮雲モ
 ナキサニ見ユル海士ノ釣舟」一碧樓ニ四婢アリ、常、高、何、何トイフ、
 常子齡二十左右、湿齒、豊而艶、高子温而美二八許、十一日真野、曾根、
 予三人伊豆山瀧湯ニ浴ス、浴舎ハ相模、伊豆、中田、若松、湊、江島ト
 イフ、構家山腹、枕海岸、以樋通湯、為瀑布、伊豆権現社ノ直下ニアリ、
 大島初島ヲ南微西雲煙ノ中ニ見ル、東微南ニハ笠岩、真鶴崎ヲ眺ム、昼
 食（鮑ノ酢ト煮ノ二種）二人分、二十六錢、茶代、三人分十錢、帰舎、
 十二日ニ宿料等ヲ払フ、但シ自炊別ニテ炊事婦ヲ雇フ、おみね婆トイフ、
 一周間雇料三十錢、紀念ノ為メ數品ノ物価ヲ記サン、二人分ト知レ、酒
 二合九錢、大鯖十一錢、黒鯛十五錢、二十三錢、雁皮紙二帖二十四錢、
 野菜一切二十五錢四リン、旅舎へ心附ケ一円、室代ヲ逸ス、十三日熱海

出發、再ビ日金山―五十丁―ニ向フ、予ハ徒歩、真野氏ハ山駕籠、地藏
 堂裏ニ開山松葉上人ノ墓アリ、神功皇后時代ノモノトイフ、休ミ、十国
 峠、此日亦曇ル、僅ニ三島、沼津近傍ト天城山ヲ雲煙ノ中ニ見ルノミ、
 一里半一本杉、一里摺鉢、一里許ニシテ頼朝鞍掛水、去此四五丁野馬池
 アリ、掬水医渴、伝曰頼朝斃馬池辺、有一野馬、頼朝掛鞍於此野馬、掬
 水而去云、故有此名、箱根駅ニ至リ山木屋喜右エ門方ニ昼食ス―二人分
 二十四錢―、芦の湯休ミ―二人分六錢―、木賀ヲ経テ塔の沢、福住屋ニ
 泊ス、茶代二人分二十錢、泊料二人分八十錢、此夜大ヒニ下痢ス、神薬
 ヲ吞ム二回、入浴一回、十四日人力車―二人分四十六錢―小田原、小田
 原神奈川間馬車代一円九十錢、二人分？、途中休ミ鶏卵二個三錢、神奈
 川ヨリ汽車、二人分五十錢、帰宅ス、此行予ハ健脚ニ任カセ毎日徒歩、
 在舎スルコト少シ、お峯婆曰ク、「お飛脚さん」ト、箱根山中大涌谷附
 近通過ノトキ渴ニ堪エズ流水ニ漱ガント水ヲ口ニス、ハツト氣附キテ之
 ヲ吐出ス、毒氣ヲ恐レテ也、野夫ニ逢ヒ地水如何ヲ問フ、彼レ曰ク其氣
 アリ注意セヨト、予思ハズ身振ヒス、道中ニ用心スベキ事ナリ、其為メ
 カ此夜大瀉シ真野氏ハ電報ヲ發センカト云フニ至レリ、惣入費十四十六
 錢五リン五毛也、十七年八月八日平岡道生君―沼津学校ノ後輩、後兵学
 校教授タリ、初メ機関学校ニ出仕スト共ニ上野ヨリ前五時二五分發汽
 車川口辺浸水点ニ大宮ハ分岐点、田野ノ景ハ省ク、熊谷―八時―ニ至リ
 小憩、發車セントス、一翁蒼惶曰ク、私ノ居処ハ何処カトウロ／＼ス―
 堂大ニ笑フ、既ニシテ汽笛一声發車ス、如何ニセシカヲ知ラズ、深谷辺
 ヨリ左方ニ山嶽ヲ望ム、新町、烏川橋、山甚近シ、高崎、九時車着ス、
 下車ス、二人徒歩混悠々ト談リナガラ進ミ行ク、車夫曰ク大爺安中宿マ
 デ乗リマセンカト、僕之ヲ聞キ道ヲ誤リタルヲ知り、戻ルコト二三町、
 右折？シテ伊香保道ニ出ヅ、二人空腹甚シ、平岡氏堪えズ一個三厘ノ黒
 砂糖二ツヲ以テ飢ヲ凌グ、此日大暑無風瓶中ニ座スルガ如シ、大ヒニ飢
 エ殆ンド歩行スル能ハザリシ、井出村ナル僻村ノ丸山某ナル方ニ入ル、

肴ハ^{ニシ}ハハノミ、乃チ梅干ト此^ニ麦飯ニ飢ヲ凌グ、薩陀阿ノ麦飯ニモ相似タリ、椎木村―高崎ヨリ三里―ニ休ム、流汗満身、ツマサカ上リ谷川ヲ渡リ漸ク登リ山麓ノ野、谷川ヲ渉ル、秋草咲キ乱ル風光絶佳、上、下、歩々景色変ズ、峽ニ入ル、打曇、冷氣来ル蘇生ノ思アリ、^{ヒツラン}蝸ハ高ク吟ジ、葛籟夢中仙境ニ入ル、溪流ニ足ヲ浸ス、此水榛名山ヨリ出ツト云フ、上レバ峯林村―伊香保ニ里十町―、坂少ク峽、左ニ榛名、右ニ赤城聳ユ、其麓ハ利根川、峽坂ヲ下リ又上ル水沢村、小沢観音―坂東十六番ナリ―、樓門、本堂、六地藏、念仏、六角旋回堂等アリ、屋棟ニ葵ノ金紋ヲ附ス、徳川氏ニ縁故アリシカ、此堂ニテ一商人ト相会ス、此人曰ク吾父ハ三年二百八十八ヶ所ノ観音ニ順礼シテ其紀念碑ヲ六角堂ノ右側ニ立ツト、之ヲ見レバ碑ノ銘ニ「西国四国坂東秩父百八十八ヶ所供養塔」ト記ス、観音堂ノ遍額ニ「たのみくる心も清き水沢のふかき願をうるぞうれしき」トアリ、坂ヲ上、下、左ニ峯上千間ノ祠アリ、坂ヲ下リ、上リテ一里十町ニシテ伊香保ニ着ス、木村太郎平ニ投宿ス、疲労甚シ、宿屋ニ二種アリ、一ハ大屋―此処ニテハ大屋様トイフ―、一ハ町宿トイフ、大屋ハ小暮武太夫―一泊ヲ許ルサズ―、同八郎同金太夫等、島田等十四軒アリ、木村ハ町宿ノ上等ナル者ナリ、戸数大約三百、夜、按摩ニ揉マス、九日出立、湯元ニ至ル、戻リテ右ニ登ルコト十二丁ニシテ、二上嶽下ノ蒸風呂ニ入ル、蒲席ヲ布キ其上ニ竹簾ヲ掩フ、蒸汽濛々僅カニ物色スベシ、男女混臥ス手巾ヲ湿シ口ニ銜ヘ喘々トシテ閉息ヲ禦グ、疝寸白、痔ニ特效アリ、風呂ヲ出デ右方裏山ヨリ幽経樵路ヲ四五丁ニシテ山背ニ出ヅ、右ニ黒髪山、行クコト五六丁ニシテ華表、是ヨリ險峻、一歩草ヲ把握シ、一歩岩石ニ取り附キ、一歩一歩道岐ス、中腹ノ小路ヲ辿ル、秋花爛漫山峯ヲ望ミ溪谷ヲ俯看シ塵外風光路益險阻、羊腸、道絶ユルカト思ハル、氣ヲ勵シ、漸クニシテ二間許ノ鎖ヲ把持シテ上ル、五条ニシテ頂上ニ達ス、岩石上本堂―方二間ホド―、大山住尊ヲ安置ス、山ヲ相満トイフニ石像、右ハ大山住尊―衣冠ヲ着ク―、左ハ相満藏龍權現ニテ剣ヲ把ル、

相満ノ御手洗水アリ、維新前ハ此山神ヲ単ニ藏龍權現ト称セリト、神官一人白衣袴ヲ着シ祈誦中ナリシガ、ヤガテ種々ノ談ヲ交ユ、曰ク此黒髪山ハ附近五里中ノ最高峯、朝ノ外ハ常々雲霧、眺望ヲ絶ツ、晴ルル時ハ富士、筑波、日光、赤城等時ニヨリテハ東京ヲモ見ルベシト、下山數丁又鎖アリ、下リテ牧場ニ出デ大道ニ出ヅ、榛名行ノ道ヲ神官二問ヒシニ西ヘ西ヘト云フ、予曰ク右カ左カト、曰ク右ナリ、又問フ右カ、曰ク右也ト、故ニ大道ヨリ右折ス、少ク平安ナリ、伊香保ヘ向フ様ニ覺ユ、乃チ地圖ヲ出ス、時恰モ正午ナリ、木枝ヲ地上ニ立テ其影ニテ計レバ左方即チ西ナリ、乃チ引キ返シテ牧場前ニ来ル、御手洗ノ湖辺ナリ、水清ク草緑ニ山色碧ナリ、之ニ沿フ、左ノ坂ニ上リ眺望ス、湖面、伊香保富士等ノ景色得モ云ハレズ、數丁ニシテ華表アリ、ソレヨリ下ルノミ、左ニ葛籠岩アリ、榛名杜ニ詣ス、石階ヲ上リ門ニ入ル「銚の嶽」ナル一大岩聳ユ、其下ニ洞穴アリ、於福岩、御姿岩^{ミカガ}ヲ背ニシテ本殿立ツ、榛名ヲ下リ一里許ニシテ二軒茶屋小憩、谷ニ下リ溪流、諸村落ヲスギ「下三ノ倉」ニ出ヅ、草津街道ナリ、烏川ヲ渡リ、左折、石標ニ妙義道ト記ス、一峠ヲ下リ小丘、小溪谷、諸村ヲスギ「下三ノ倉」ノ三軒茶屋ニ達ス、日暮ル松井田マデハ二里、種々平岡氏ト評議ス、道案内ヲ附クレバ可ナラント、茶屋ノ主人―人品骨柄ハ立派ニテ眉太ク髭アリ古武士ノ風アリ―ニ問フ、其時傍ノ馬子風ノ人曰ク「アナタガタ」ニテハ松井田迄ハ案内ナクバ六ヶ敷イネ、主人ハ微笑シテアリシガ其婦―此婦甚タ醜ナリ―ト計ルコト數分、然レドモ自ラ行カントハ言ハズ、予心、焦燥^{シヤウサウ}ツ、案内者ナキカ、主人曰ク松井田ニ行クニハ泊ラニヤナラナイカラネト又微笑ス、予其意ヲ知ル、曰ク一泊ノ料ヲ此方ニテ出シ、オ前サン何錢ニテ行クカ、主人益微笑シテ又婦ト計ルコト數分、曰ク往復ニテ二日カカルカラネエ、左様サトイヒテ又婦ト計ル、予是ニ於テ平家落武者的ノ人物モ外面ノミ、内甚ダ愚物、婦ノ方勝レルヲ見ル、乃チ勵声シテ曰ク幾許金ナリヤ、主人辛フシテ曰ク、宿泊費ノ外五十錢ナリト、平岡氏ト予ハ相視テ其足元

ヲ見ラレタルヲ默認シ、且ツ高価ノ上ニヒヤカサレタルヤウニモ思ヒ、イマイシクナリ直切モ残念、頼ムモ残念、予曰ク「チヨツ」君直行セザルカ、氏曰ク「ムー」ト、主人ニ謝ス、主人微笑ス、二錢ヲ投ス、婦大ニ謝ス、谷ニ下リ行ク、烏川ノ傍ニテ行ク手ヲ聞ク、曰ク「此処ニ一軒ノ旅舎アリ」サレド三軒屋マデハ行カルベシ、又オ頼ミナラバ宿泊セシムベシト、平岡氏ハ元ト予ノ直行説ニ不服ナリシ故此処ニ泊ラント言フベシト推量シテ「君泊ルカ」氏曰ク「否ナ三軒屋マデ行カン」ト、予案外ニ感ジ今更ラ泊ラント主張スルモ心苦シク乃チ曰ク「往カン」ト相視テ大笑ス、行ク、語ツテ曰ク先キノ二軒茶屋ニテ五十錢ハ高シ三十錢位ナラバ予ハ頼ム積リナリシガ君ハ如何ト、氏曰ク僕モ其位ノ積リナリシト、日暮辛フシテ三軒屋ニ達ス、泊リヲ求ム、主人諾ス、足ノ汚レハ前ノ溝ニ洗ハレト、積ミ重ネタル畳ヲ数枚ヲ取り卸ロシテ敷キ、座ヲ作ル、主人ト談話ノ序ニ先キノ案内人ノ事ニ及ブ、主人曰ク此節ノ不景氣ニテハ大丈夫ノ人足ニテモ一日十五錢ヲ得バ手柄ナリ、然ルニ彼レ五十錢トイフ法外ノ申分ナリ、君等ノ足元ヲ見且ツ人体ヲ見テ食リタルナリト其余不景氣談ヲ聞キテ寝ニ就ク、偕此客舎ハ今ハ廃業、極メテ大破ス床ハ朽チテ危ウク歩毎ニ踏ミ破ルカト怪マル、便処ノ如キハ羽目板隙ダラケ半朽チテ倒レントス、若シ人ノ住スルナクバ所謂相馬御殿ノ化物屋敷ト一般、夜具ハ乞兒ノ破レ衣服ヲ綴リ合セシ如ク、之レニ触レバ「グチャリ」ト手ニ膠スルガ如シ、蚤、蚊ハ飢ニ乗ジテ客ヲ襲フ、此態ニテ就寝、疲労ニテ眠ラントスルモチク、刺撃セラレテ眠ル能ハズ、転顛反側ス、平岡氏ヲ窺フニ氏モ亦然リ、苦惱言シ方ナシ、眠ラントシテハ攻メラレ、辛フシテネムリ、曉ニ達ス、十日三軒屋出立、舎ノ老爺ト同行方今ノ不景氣ヤ旧幕時代ノ談話シ乍ラ九十九川ノ橋ヲ過ク、九十九谷ヨリ流れ入ル故ニ名クト云フ、松井田駅ニ入ル、屋上石ヲ置ク家多シ、左折ス、碓井川ノ鉄道線工事最中ナリ、碓井川ノ「ハンギリ」渡シニテ対岸ニ達ス、「ハンギリ」ハ盥ト等キ物、直径五尺位、

四五人ヲ容ルベシ、橋落ちタルヲ以テ之レニ代フルナリ、人夫一人之レヲ引キツツ徒渉シテ渡ルナリ、予等ト外人一人之ニ乗レリ、中流ニ至ル、器底、石ニ膠着シテ動かズ、挽夫大声援助ヲ呼ブ、一人来リテ助ケントス、既ニシテ動ク、我が人夫援助ヲ謝シ急流ニ抗シテ対岸ニ達ス、畑、村落ヲ過ギ妙義山ニ登ル、大門本社末社等甚タ壯嚴ナリ、旧上野宮様ノ旧別殿ニ至ル、宮様トハ東叡山寛永寺座主輪王寺宮即チ明治ノ北白川宮能久親王ノコトナリ、台湾軍中ニ薨去セラル、本社神官白井巖氏（亡）ノ總理石井義正氏―花房義質氏ノ徒弟トイフ―ニ会ヒ、其案内ニヨリ宮様ノ別殿ヲ拝ス、上段ノ御座所アリ、遍額、晨光閣ノ文字ハ殿下ノ御手蹟ナリ、又左方ニ亦扁額アリ勝海舟伯ノ染筆、郵情山趣ト記ス、殿ハ東面ス、中仙道、碓井川、東京ノ方面、一眸中ニ収リ、絶景ナリ、春色、雪景、何レモ佳絶ナリト云フ、石井氏云フ、中ノ峯ノ諸名所即チ石門等奥ノ院ヲ見尽サンニハ五日間ヲ費サバ可ナリト、乃チ辭謝シテ左方中ノ嶽登リノ途ニ入ル―本社ノ後ハ妙義ノ本山ナリ―、金鶏山ノ右端ニ蠟燭岩アリ、上ルコト数丁ニテ金鶏山ノ左端ニ燕岩^{ツバクロ}アリ、形ノ如シ、金鶏山ノ左方ナル小山ヲ大ダケ山ト称ス、彼ノ名馬磨墨ヲ出セリト云フ、峻坂数丁ニシテ唐鳥居ニ至ル、本社ヲ去ル一里十丁、此処ハ広場ニテ西南、信甲ノ連山一望中、三丁許シ右方ニ第一石門、又量岩^リ、ソレヨリ少許ニシテ本社、左方大墨、右方石階數十間ニシテ武尊社有リ、左ニ廻リ、レバ鬚摺石ナリ身ヲ斜ニシテ辛フシテ左右ニ上ル、僅カニ一、二間、頂上ノ岩ニ達ス、此レニテ下山ノ途ニ就ク、若シ本社ヨリ案内人ヲ誘シ来ラバ第一石門ヨリ胎内クグリ「蟹ノ横這」等ヲ見ルベク、約二時間ヲ要スト言ハレシガ時既ニ遅キ故、惜クモ実践セザリシ、山ヲ下リ松井田道ニ出ヅ、新堀トイフ処ハ大道寺駿河守ノ居城ナリシト聞ク、大ナル蛇ヲ見ル、鉄道線路ヲ行キ日暮シ磯部鉦泉ニ至リ林屋ニ泊ス、一老人ト同宿ス、此鉦泉ハ碓井川ノ右岸、磯部鉄道駅ノ右方窪地ニアリ、近時盛況ヲ呈シ来ル、現今建築繁盛ナリ、泉ハ極メテ苦シ、湯泉ハ地面ヨリ湧出

ス、之ヲ汲取リテ温ムル也、浴客甚多、其左傍丘上ニ群馬県令佐藤与三氏ノ別荘ヲ新築ス、十一日朝出立、涌泉ニケ所アリ、道ヲ挟ンテ東西ニアリ、東者多量ナリ、約四尺四方ノ木匡ヲ造ル、水面殆ンド地面ニ至レバ其上ニ上ラズ他ニ洩ルルナルベシ、碓井川ヲ渡リ安中、板鼻、高崎ニ至ル、汽車時刻余裕アリ、入湯ス一湯銭一銭、洗シハリン一、昼食、乗車、帰宅ス。十九年八月三日母上、妻、義妹シゲ、予、五人野州ノ塩原温泉行ヲナス、上野ヨリ汽車、宇都宮下車ス、白木屋ニテ昼食、十一時三十分人力車ニテ出立ス、白沢ヲ経テ鬼怒川河原ハ約一里トイフ、其源ハ大矢川トイフ、氏家駅ノ福村屋ニ小憩、四時四十分出立、雷雨、晴、八時矢板駅ニ着、住吉屋仁平方ニ宿ス、四日五時半矢板発、鉄道線路ニ沿フ、但シ鐵路ハ三島駅マデ竣成ストイフ、保喜川原ハ躑躅ノ名所トイフ、九時二十分関谷駅着、関谷ヲ出ツ、新道ハ旧高平峠越ヲ開キタルモノ、有名ナル道路県令ト称セラレタル三島通庸氏ノ開キタル者ナリ、県下ニ厳命ヲ下シ、人夫ヲ強募ス、応セザル者ハ嚴罰シ、陣鐘太鼓ニテ出場ヲ促シ圧制遂ニ県下ノ道路ヲ改良新設ス、初メハ怨嗟豪々タリシガ其竣成ノ後、其徳ヲ賞シ三島駅ニ三島神社ヲ建ルニ至レリ、此高平越ヲ平ゲテ塩原道ヲ造ル、路幅四五間ナリ、昔時ハ此峻嶮難路僅々数里ニシテ一日程ナリシト、新道ヨリ諸処ノ旧道ヲ望ミ見ルニ箱根ノ険モ比スルニ足ラズ、羊腸タル細路、馬僅カニ行クコトヲ得タリト、然ルニ新道中竣坂ト云フ者モ東京九段坂ヨリモ緩ナリ、途中橋四、五ヲ架ス、或ハ断崖ニ依リ或ハ急湫流ニ架ス、右方梵天瀧アリ、一橋下ヲ過ギテ湫流に落ツ、絶佳、橋アル処ニハ瀑布アリ、日光ノ霧降ノ如キ者多シ、塩原ニ入ル、塩原ニハ福渡、門前、畑下戸、古町大綱ノ五区ニ分ツ、福渡温泉場、左折、塩湧橋、竣坂ヲ過ギ十町許ニテ十二時四十分塩ノ湯ナル明賀屋ニ着、夕刻入浴ス、其浴槽タルヤ階段ヲ下ルコト三十間許、第一槽ハ冷ノ湯、他ニ比シテ冷ナリ、第二湯ハ較熱ス、第三槽ハ匠王湯ト云フ岩窟ヲ突チタル内ニアリ、前面ハ鹿股川ノ清流、仰ゲバ絶壁、真ニ仙境ナリ、

客室ハ山腹ノ岩上ニ架シテ作ルモノアリ、平地僅少ニシテ峯巒四周嵯峨突兀、川ニ沿ヒタル一窪地ナリ。五日隣室ノ日光人星野某、宇都宮人印南栄吉両氏ト共ニ須巻ノ湯瀧ニ行ク、畑下戸ヲ過ギ川ヲ渡リ左ノ山中ニ在リ、高サ一間半許ノ湯瀧六条懸ル、温度好適、休所ニテ名物ノ餅一益二銭一ヲ食フ、湯銭ハトラズ、此所ニ蠅ノ多キコト言語道断ナリ、集ルコト黒山ノ如シ、帰途本街道ニハ道傍其他ニ温泉アリ、寺アリ、妙雲ト称ス、名妓高尾ハ此地ヨリ出ツ、寺ニ其墓アリシト覺ユ、古町ニ至ル、亦温泉数処ニアリ、帰舎入浴ニ回、六日星野氏、印南氏ト一番二番瀧見物ニ同行ス、案内者ヲ頼ム、柏屋ノ客モ四五人同行ス、鹿股川ニ沿ヒ山腹ヲ上下シ荊薊ヲワケ湫流ヲ徒渉シ、薄、茨、山椒等ノ繁茂セルヲ樵路幽径ヲタドリ、薄ハ人ノ丈ケヨリモ高シ、路ハ險難ナラザルモ行人稀ナレバ道ナキ所アリ、面部、手足ハ荊薊ニ刺サレ苦シ、凡ソ一里程ニテ谷ニ下ル、即チ第一瀧ニ至ル、雌雄ニアリ、実ニ佳景言語ニ絶ス、雌ハ右方、雄ハ左方ニアリ、更ニ山腹ヲ攀ヂ湫水ヲ渉リ、其中ヲ行キ水ニ脛ヲ没シ、朽木ヲ把ル、木折レ水ニ没セントシ或ハ奇岩苔滑カナルニ這ヒ上リテ滑下セントシ足ヲ失シテ爪ヲ痛ム、数丁ニシテ辛フシテ二番瀧ニ達ス、高サ二十丈許、幅十二間許、其上ニ至ルニ二十間四方許ノ大盤石ニテ其上ヲ流レテ落下スルナリ、此レヨリ川原ニ沿ヒ困難五六丁ニシテ五間程ノ瀧アリ、其上方迄進ミシガ案内者モ少シク忘レタル様子ナリシカバ引返シタリ、予ハ先頭、印南氏ハ第二ニ続カレタリ、引返シテ最初ニ徒渉シタル湫水ヲ廻ルコト三丁許ニシテ一盆地ニ達ス、辛苦ハ二番瀧ニ行クガ如シ、此地ハ三面共ニ三、四十若クハ四、五十丈絶壁ニ圍繞セラレタル窪地ナリ。壁上茂林ノ間地層ノ欠所ヨリ一、二条ノ小瀑布懸ルベキニ水枯レテ瀧ヲナサズ、雨ナキ故ナリ、此瀧ヲゴメイガ瀧トイフ、若シ水アリタラバ莊觀思ヒヤラル、遺憾千万ナリシ、此窪地ノ川原三、四丁許ナリ、帰途雷雨ニ逢ヒ衣服湿ル、帰舎入浴、疲勞ヲ忘ル。七日印南氏小学教員中山氏ト共ニ中塩原八幡社ノ逆杉ヲ見ル、殿宇荒廢ス、杉ノ周

二丈以上、高カラズ、二株相双ブ、夫妻ノ如シ、祠傍「一夜竹」ナル者アリ、大明竹ナランカ、里俗ニ言ニ一夜ニ生長スト、^{ホウキ}蓆川ヲ過ギ二三丁ニシテ溪流アリ之レヲ隔テ、小丘アリ、木葉石出ヅ、丘ヲ縦断セシ如ク土層相重リテ煉瓦塀ノ如キモノナリ、之ヲ拾ヒ取り打チ割レバ木葉、層片ノ間ニ介在ス、楓、柳等ノ葉ナリ、茶店ノ翁イハク此石ハ此数間ノ断面ヨリ出ヅルノミ、地名ヲ幡久保^{フナホ}?ト云フ。又数丁ニシテ幡岩ナルアリ、其紋渦巻ク幡ノ如シト云フ、往觀セズ、此ノ如キ者ハ永ク保存シタキ者ナリ、今ハ如何セシヤ、「旧跡源三洞」ノ標杭ヲ見ル、同行人往クコトヲ好マズ、幡岩ノ時モ亦然リ、同好ノ人ニアラザレバ同行スルモ益ナク興味モ少キモノナリ、单身心ノ俣ニ見ルニ如カズ、九日印南、中山両君ト共ニ新湯ニ往ク、須巻瀧道より右折、山路ニ入ル、広原ヲ行ク、溪流ヲ過ギ上下シテ新湯ニ達ス、藤屋六平ニ昼食ス、硫黄泉ナリ、其ノ噴出スル洞アリ、^{ムナ}貉湯、寺ノ湯、中湯、上湯等アリ、帰途ニ就ク、鶏頂山ヲ望ム、鶯鳴、虫吟、野花咲、秋色濃ナリ、其後モ須巻湯、福渡ニモ行ク、福渡ノ寿美屋ニ裸湯アリ、中ニ岩石ノ長キ者横タハル、不妊質ノ婦人之ヲ抱キツツ浴スレバ妊娠スト云フ、又或日旅舎主人君島氏其他数人ト芋石拾集ニ出掛ク、福渡ノ河原湯ヲ右ニシ細路ヲ過ギ山脈ノ岩石混合ノ壁間ヨリ出ス之ヲ拾フ、六七箇、又中山氏ト貝石拾ヒニ同行ス、前記ノ一、二番瀧ノ道ヨリ鹿股川ヲ渡リ数丁ニテ之ヲ見出ス、貝ノ痕跡アル者ヲ割レバ貝層ヲナス、螺、蛤、蜆等数種アリ、昔時海中ナリシヲ証明ス、中山氏ト源三洞ヲ見ル、小丘上ニアリ、鍾乳石ヨリ成ル洞口狭ク、中広シ、四坪位アルベシ、松明ヲ燃シテ狭キ穴ニ入ル、夫レヨリ鮫石ノ採拾ニ行ク、谷ニ下リ丘ニ上リ等シテ辛フシテ之ヲ発見ス、六稜ノ結晶ヲナス。或日中山、大塚氏ト大網湯ニ入浴ス、此日即八月十五日平岡道生、山本良三郎両君来会ス、母等家族ハ此地ニ滞在シ、予ハ両氏ト温泉廻リニ同行ス、十六日八時出立、関谷ヲ経、^{シキ}鴨内村、太田原ヲ過グ、那須野ノ山辺ナリ、馬背ヲ借ル、那須野ヲスギ木股川、那賀川ヲ涉リ板室湯元ニ達

ス、此地ハ谷底ニアリテ四方山ニ包マル、浴舎十軒ホドアリ、全然旧習的僻地、那賀川ニ半バ抱カル、大黒屋ニ泊ス、翌十七日出立、峻坂ヲ下リ谷ニ入り又上下シ九折羊腸ヲ徑テ三里廿八下ニシテ三斗小屋^{サンドゴヤ}ニ至ル、此地ハ明治元年会津藩兵、官軍ト戦ヒシ古戦場ナリ。温泉ニ一浴シ大黒屋ニテ昼食ス。此地ハ那須山噴火坑ヨリ約一里許ノ山嶺近クニ在リ、幽静ニシテ開闊ナリ。此レヨリ難道嶮路言語ニ絶セリ、小沢川ヲ徒渉シ、道窮リ硫黄ノ湯瀧ノ絶壁ヲ攀ヂ上リ、円形ノ山ニ達ス、五葉松多シ、乳母原ニテ小休ニ東方ニ噴烟ヲ見ル、噴火口ニ所アリ、其左方ナル火坑ノ縁ニ出ヅ二十間四方許ノ火孔ヲ窺^シク、立ツ能ハザレバ腹這ヒタリ、硫烟轟々臭氣鼻ヲ衝ク、濃氣ニ堪エズ、案内人曰ク四五年前一夜突然噴火ヲ吐出セリト、此火坑ノ縁ナル細路ヲ行ク、若シ一步ヲ過チテ失スレバ硫黄地獄ニ落^ルノミ恐ルベシ。此頂上ヨリ北東ニ方リ遙カニ人家ヲ見ル、白河ナリト云フ、東北ニ下リ、焼石原ヲ過キ、小笹原ヲ経、大丸湯泉社ノ背ニ出ヅ、温泉舎中屋ニ泊ス、此地ハ那須獄ノ中腹ニテ浴舎一軒家アルノミ、那須温泉中ノ一ニシテ最高二位ス、眺望絶佳登仙ノ思ヒアリ、那須野原ハ眼下ニアリ、南、東ノ「パノラマ」寸眸裏ニ収ル、浴槽三、湯滝三条、十八日出立、下リ、北ノ湯、熊ヶ谷源三氏ニ小憩ス、上ルコト四丁許ニシテ駒^{ウマ}?瀧ヲ見、又下リ那須原ヲスグ、風光佳景、道岐スル処ニ標アリ、右北湯、左大丸道各二十七丁、夫レヨリ十丁余ニテ那須湯元ニ達ス、正午小松屋ニ投ズ、殺生石ニハ柵ヲ繞ラス虵等ノ斃死セルヲ見ル、其下ヲ流ルル水ハ毒氣アリ呑ムベカラズ、此小川ヲ夾ミテ旧式ノ旅舎連ル、新規ノモノ九軒アリシト覺ユ、十九日六時四十分湯本ヲ出立、馬背ヲ借リ松子ニ至ル、徒歩スル一里高久、人車ニ乗リ東小屋村、三島村、開墾地ヲスギ午後一時半矢板ニ至ル、氏家ヲスギ七時半頃宇都宮手塚屋ニ投宿ス、廿日朝新聞紙ヲ見シニ東京ニ於ルコレハ大流行ノ記事中ニ芝佐久間町附近ニコレヲ患者一人トアリ、溝口善補兄上ノ附近ノ故ニ何トナク氣ニ掛リ居タリ、午後五時宇都宮發八時三十分上野着、九時半

婦宅セシニ兄上ハ去ル十七日類似コレラニ罹ラレ病院ニ入レラレ遂ニ死去セラレタリ、嫂梅子ノ言ニ兄上ハコレラデハナイト繰り返く病院ニ入レラレタリト、当時重豊兄上ハ出張中、予ハ旅行中、実ニ遺憾千万ナリ、且ツ予婦宅後ニ熱発シ、腸カタル、栗田胤顕氏ノ診察ヲ受ク、静臥按養、運動ヲ禁ゼラル、廿二日病ヲ押シテ工科大学ニ行キ当直村上義路君ニ会ヒ予ガ名ヲ以テ兄病死ノ届ヲ出ス、本所兄方出入ノ車夫磯吉ヲシテ桐ヶ谷火葬場ニ亡兄ノ遺骨ヲ受取り、菩提寺芝立行寺（大久保彦左衛門ノ墓ノアル有名ノ寺）ニ届ケシメ、嫂、予、岳父阿部久次郎氏并予ハ白骨入ノ瓶ヲ寺ニ預ケ回向ヲ受ケ婦宅ス、亡兄ハ幼ニシテ大伯父ノ養子トナリ物質上ハ誠ニ豊カニテ大家ノ若殿様、弓、馬、槍、劍、漢籍ノ修行等ノ外出ニハ僕一人ヲ従ヘテ往来セラル、然レドモ養父ニ女子ナク遠山某ノ娘ヲ養女トシ兄ニ配ス、女子二人ヲ挙ゲ共ニ夭死ス、嫂常子ハ沼津ニテ病死ス、亡兄ハ沼津兵学校生徒タリシガ後独り出京シ横浜ニ英語修行ヲナシ開拓使ニ出仕シ、後商法ニ従事シ、又工部省ニ出仕中此病ノ為メニ死セラル、子ナク、嫂梅子戸主トナリ、音信絶ヘ後養子ヲ迎ヘタリト云フ、重豊兄、予、弟重秀三人相計リ大伯父溝口炊夢、同妻たん、同善補ノ墓石ヲ建ツ、僅ニ溝口家ノ祀ヲ存ス、亡嫂常子ノ墓ハ沼津大門町正見寺ニアリシガ大火ノ為メ墓石不明トナリ合号塔ニ改埋セラ、女吉子ノ墓ハ東京池ノ端七軒町荒川家菩提寺宗賢寺ニ在リ、大伯父溝口炊夢ハ維新後東京ニ止リ浅草寺々内ニ悠々晩年ヲ樂シミ没セラル、然レドモ実子ナク妻たん女先ニ死シ独り淋シク暮ラサレタリ、文筆アリ朝野新聞紙ノ雑報記者タリシコトアリ、其前ニハ久右衛門町ニ手跡師南セラル、手跡ハ巻凌湖ノ高弟ニシテ能書ナリ、遺墨ノ遍額ト手本一帖アリ保存ス、炊夢ハ祖父川我ノ実弟ニテ溝口家ノ養子、御小納戸頭取ヨリ御先手頭トナリ従五位下朝散大夫美作守ニ叙セラレ元高三百石ニ足高ニテ千二百俵トナル、武技モ亦有リシト云フ

（以下翻刻省略）